

---

# アマキス・プラス+

FafunarV

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アマキス・プラス+

### 【Nコード】

N6360V

### 【作者名】

F a f u n a r v

### 【あらすじ】

ラブプラス、アマガミ、キミキス、三つのギャルゲーを一つにしちゃいました？

誰得？

いや俺得？

キャラごとにストーリーを作るので

そこまで他作品の意識は薄いかもしれません。

登場キャラ

高嶺愛花 小早川凜子 姉ヶ崎寧々 絢辻詞 桜井梨穂子 棚町薫  
上崎理沙 七咲逢 中多紗江 森島はるか 星乃結美 祇条深月  
二見瑛理子 咲野明日夏 栗生恵 里仲なるみ 水澤摩央

次回ヒロインリクエスト募集中!!

募集要項は活動報告からお願いします!!

Twitterでアマキス・プラス+の更新情報をGET!!  
f a f u n a r vで検索!!  
フォローしちゃおう!!

## はじめに

アマミス・プラス+は  
大人気恋愛ゲーム

アマガミ  
キミミス  
ラブプラス

のキャラクター達で  
勝手にワイワイガヤガヤキャッキャウフフさせようってな魂胆の  
俺得小説です！！

アマガミ、キミミス、ラブプラスからの  
営利を目的とした制作の為に作った小説ではありません。

また  
現存します人物、市町村、キャラクター、建築物、公共物等は  
ちよつと関係あつたりなかったりします。

という訳で  
アマミス・プラス+  
お楽しみくださいませ！！

作者でしたゝ  
グッバイ！！

## 次回ヒロイン募集のお知らせ

ただいまアマキス・プラス+では  
次回作のヒロインのリクエストを募集しております。

以下の説明に従って御投票お願いします!!

一人持ち票を三つまでとして

感想欄か活動報告コメント欄に好きなキャラの名前と  
そのキャラに何票入れるか名前の横に書いてください。

例1)

中多紗江 3票

のように一人に3票入れてもいいですし、

例2)

祇条深月 2票

咲野明日夏 1票

例3)

水澤摩央 1票

里仲なるみ 1票

上崎理沙 1票

と分割で入れても構いません。

なお、投票可能キャラクターは高嶺愛花 小早川凜子 姉ヶ崎寧々

絢辻詞 桜井梨穂子 棚町薫 上崎理沙 七咲逢 中多紗江 森  
島はるか 星乃結美 祇条深月 二見瑛理子 咲野明日夏 栗生恵  
里仲なるみ 水澤摩央 塚原響 田中恵子 小早川美千 川田先  
生 高橋先生 夕月薫子 夕月瑠璃子 飛羽愛美 飛羽愛歌 梅原  
正吉 柊明良  
妹二人はちよつと受け付けていません。

時期が来次第、妹二人の登場を予定しています。

ではよろしく願います!!

## 高嶺に咲く愛の花1（前書き）

メインヒロインプロフィール

高嶺愛花《たかね まなか》

出典作品：ラブプラス

血液型：A型

誕生日：10月5日

星座：天秤座

趣味：お菓子作りとピアノ

好物：焼き芋

テニス部に所属する。2年C組

一人称は「私」。

実家は開業医で成績は常にトップクラス（絢辻詞、星乃結美と良い勝負）でテニス部女子のエースというまさに才色兼備を絵に描いたようなお嬢様だが、育ちの良さゆえ真面目すぎて近寄りがたい雰囲気醸し出しており男子にとってはまさに「高嶺の花」である。しかし、その硬い雰囲気裏には辛い過去があった。

ポニーテールと太い眉毛が特徴。「なんて」が口癖である。

## 高嶺に咲く愛の花 1

僕は二年の城谷信一、

でどうして今、走っているかと言うと…

「テニス部の入部届け出すの今日までなのがいい？」

二年の勧誘にひっかかって、渋々入部することになったテニス部の入部届けを出し忘れていたのだ。

「どうしよう…鈴木先生いるかな？」

職員室のドアを開けると、ちょうど高橋先生と鉢合わせてしまった。

「うわっ？た…高橋先生ごめんなさい？」

「あ、び…びつくりした、城谷君ね？」

「はい、鈴木先生を探していて…。」

高橋先生は職員室を見渡す。

「うゝん居ないわね、じゃあ部活のところに行ったらどう？」

「そ？そうですか、ありがとうございました？」

規定の4時まであと二十分だ。

あの角を曲がれば…と

いきおい良くカーブした瞬間だった。

「キャア？」

「やべえ？」

角を曲がってきた女の子とぶつかってしまった。

「いっててえ…君、大丈夫？」

「あ、はい？あなたこそ大丈夫ですか？」

女の子は白いリボンで縛った黒い髪を揺らしながら、スカートについた砂を払った。

「あ…うん大丈夫、ごめんね急いでて…」



「どうして急いだの？」

「あ、それがさ、テニス部の入部届けを出しに行こうと思ってて…」

「鈴木先生を探していたんですか？」

「うん？」

女の子は少し笑った。

「テニス部の部室、反対側ですよ？」

「へ？」

確かに、こっちから先は掃除用具室だ。

「今から部室に行くので、私が持つて行きますよ？」

「ほ…本当？、って君、マネージャー？」

「違うわ、私は二年の高嶺愛花、一応選手です。」

「あ…ごめんごめん、俺は城谷、城谷信一。よろしく、高嶺さん」

「あ、はい？それじゃあ私は部室に行くから。あと、呼び捨てで大丈夫ですから。」

「ん？じゃあよろしくな高嶺！！」

「はい！！」

そう言つと高嶺は部室に向かって歩いて行つた。

俺と彼女の出会い

こんな些細なことだった。

## 高嶺に咲く愛の花2

「ねえ城谷君、大丈夫？」

「あ…桜井、うん…まあ問題ないさ。」

桜井にそう言っと、

後ろから肩に手を載せられた。

「桜井さんの言うこともわかるぞ？」

「柊…しょうがないだろう、昨日結局、鈴木先生が休みでさ。担任から怒られて…」

「城谷君はしょっちゅう遅刻とかするもんね？」

桜井はまるでお姉さんぶっていた。

「とゆうより、桜井さんもおつちよこちよいだけどね。」

柊に釘を刺されると、桜井の顔は一気に強張った。

「しょっちゅうコケたりするからね。」

俺も負けじとちよっかいをだす。

すると、さらに桜井の顔は強張ってしまった。

「うう…二人してヒドイよお？」

「お？また桜井弄りか？」

職員室から帰って来た香苗さんも

桜井を見てニヤニヤしはじめた。

「もお？香苗ちゃんまで？」

「あはは、まあ桜井の魅力ってそんなところじゃないのか？」

「え？そうかなあ？…。」

「そうだね、魅力とも解釈出来る…あつと相原に呼ばれてたんだ、じゃあ俺は隣のクラスに行ってるよ？」

「ああ、」

柊はいそいそと席から立って廊下の方に走って行った。

「あ…城谷？君にお客さんだよ？」

「俺にか？」

「ああ、入っていいよ。」

「はい、失礼します。」

ドアから入って来たのは、高嶺だった。

ポニーテールを揺らしながら、

小走りで俺の方に向かってきた。

「昨日の事なんだけど、」

「ああ…。」

「鈴木先生、まだ提出期間中に直帰しちゃったコツチも悪かったよ  
っておっしゃって。」

「あ、出張だったんだね。」

「はい、今日ちゃんと受理しましたから、安心して下さいね？」

「ありがとう、高嶺？」

そう言くとペコッと頭を下げて、

また小走りで教室から去っていった。

「へえ、城谷君、高嶺さんと仲がいいんだ？」

香苗さんが俺の顔を覗き込んだ。

「え…うん、まあね」

生返事を返すと、桜井がうんちくの如く語り出した。

「高嶺さんって、この学校で二番目にお金持ちなんだって？」

「え！？そんな人なの？」

「うん？一番はほら、音楽でいつもピアノを弾いてる…」

「祇条さんよね？」

香苗さんが答えを言うつと

また桜井が拗ね出した。

「あはは、桜井ってば可愛い？」

「ヒドイよお？香苗ちゃん…。」

俺は次の授業が全く頭に入らないくらい  
そのお金持ちという言葉が  
頭に蔓延っていた。

### 高嶺に咲く愛の花3

「確かに、高嶺さんって近寄り難いよねー。」

「異様なオーラ…。」

「愛歌先輩、そんなこと言っちゃダメですよ。」

今日ものんびり茶道部にはもう一人の部員

祇条さんが顔を出していた。

「よう深月ちゃん、あんたがいると場が引き締まるよ?」

「いえ、そんな事ありません夕月先輩。」

「りほっちとは相反…。」

「もう?るっこ先輩も愛歌先輩もヒドイですよあ?」

まだ寒さの抜けきらない四月の放課後

部室はその空気さえ吹き飛ばす様に暖かい笑いが溢れていた。

「それにしても城谷さん、ここ一週間、とってもお疲れの様子でしたよ。」

「テニス部ってキツイのかな?その、ランニングとかって?」

「愚問だな、りほっち…。」

「そうだと思いますよ、私もお父様の影響でテニスをしていた時期がありましたから。」

祇条さんはゴソゴソと筆箱を取り出すと、  
写真を一枚、取り出した。

「おーコレは凄いじゃないか?」

「はい、十羽野市民テニス大会でジュニアの部の優勝をした時の写真です。」

「へえ、深月ちゃん、凄いねえ、いつまで続けてたの?」

祇条さんはまた筆箱から写真を取り出すと

「中学校までなんです。ほら、この時も優勝したんですけど…。」

「あれ？…この二位の子って…。」

「高嶺さんだよお。」

写真の中で二位のカップを手にながら泣いて子が見えた。顔は見えない様にカップに隠れているが、そのポニーテールが彼女を高嶺さんだと教えてくれている。

「へえ、こんな過去があつたんだねー。」

それからしばらく、茶道部の話題はこれで持ちきりだった。

## 高嶺に咲く愛の花 4

今日はホームルームが遅くなって、

結局、部活にもそれが響いてしまった。

俺はラケットの入るデカイバッグを背負い、

いきおいよく階段を駆け下りて、部室へと向かっていった。

心地よい風と共に、

テニスコートからホイッスルの音と審判の声が聞こえた。

「カウント3 - 0？ マッチウオンバイ？ 高嶺？」

その後疎らな拍手と

ざわめきが聞こえて、

高嶺が部室に戻って来るのが見えた。

「あ…城谷君、今日は部内の練習試合だから貴方はまだゆっくりしててもよかったのに。」

「嫌、そういう訳にもいかないだろ？ 人の試合を良くみて学ばなくちゃ」

「そう…よね、ごめんなさい。」

高嶺はいつに無く暗い顔だった。

「いやでも…そ、それにしてもさっきの試合、圧勝だったじゃないか？ 凄いよ高嶺？」

「あ…うん、でも偶然だから。」

「そう、なの？」

「う…うん、そう…じゃあ私は先に帰るから。」

すると高嶺は早足で部室に駆け込んでしまった。

「どうしたんだろう？」

俺も一応部活を始めていると、手塚部長から呼び出された。

「城谷君、ちよつといいかな？」

「はい？」

コートの隅に移動すると

手塚部長がこう話した。

「再来週に新入部員を含めたダブルス大会をするのがこのテニス部の恒例行事なんだよ。」

「へえ、親睦会ってことですか？」

「まあそうだね、で君も来週の木曜日までに相手を見つけておいて欲しいんだ。」

「え…あ、そうですね。はい？」

「君は同じクラスの人もいる事だし、大丈夫だよね？」

「はい、じゃあ俺は練習に…」

と練習に戻ろうとした時だった。

「コレは男女混合ダブルスだからね？」

「へ？」

思っても見ない言葉だった。

確かに同じクラスの女子はいるけど

俺はまだその人達とは一言も喋っていない。

目の前が真っ暗になるとはこの事かと思った。



## 高嶺に咲く愛の花 5

「はぁ…どうしようかな…。」

学食のトレイを持ってボーツと突っ立っていると後ろから声をかけられた。

「ほら、君の番だよ？」

「へ？あ…あえつとそのあれくださいい？あーつとA定食？」

「はいA定食ね、」

俺はA定食をトレイに乗せて運んでいると、もう相席しか空いていなかった。

「どうしたもんかな…。」

ぐるりと一周した時だ。

「城谷君？」

「え？」

相席に座っている高嶺が声をかけて来た。

「その、昨日はごめんなさい。私、嫌なこと思い出しちゃって…」

「ああ、全然気にしてないよ。」

実際、混合ダブルスの方が気になって仕方ないくらいだ。

「よかったら、その…私、席空くから、座って？」

「そんな、悪いよ…まだサンドイッチ二つ残ってるじゃないか。」

「あ…うん、じゃあ一緒に…どうぞ」

高嶺がサンドイッチを手前に退けると

俺はそこにトレイを置いた。

「ちよつと緊張するね…。」

「そうね…。」

それから二人は黙々と何も会話せずにご飯を食べた。

「で、高嶺の嫌なことって…。」

「…。」

「ごめんね、言にくいよね。」

「こつちこそごめんなさい、自分が話題を出したのね…。」

さらに気まずい空気が続いた。

特にそれ以外にしゃべることはないまま

高嶺は席を立ってしまった。

俺もそそくさとカツを平らげると

すぐさま食堂を後にした。

「高嶺くらいしか話す相手はいないか…。」

## 高嶺に咲く愛の花 6

まだ一週間以上あるって言うのに  
こんなに焦るだなんて…

テニス部に所属している、他の女の子達は  
どうやら俺の様子を気にかけてくれてるみたいだけど…。

「まいったなあ…。」

どうも引つ込み思案な俺は、  
なかなか一步を踏み出せない。

そこに桜井がやって来た。

「おとといから大丈夫う？朝から溜息なんてついてたら、幸せ逃げちゃうよ？」

「ああ、ごめんな桜井…。」

「深月ちゃんも心配してたよ？」

桜井が指を指すと、祇条さんがにつこりと笑って手を振っていた。

「どうして祇条さんが…。」

「えーっと、疲れてそうだから。」

「あ…寝てたの见られてたんだね？」

「うん？そうだよ？」

桜井はノートを差し出すと

俺の机に置いた。

「ちゃんととっておいてあるから、次の日までは好きに使ってね？」

「あ…ありがとう、桜井…。」

「えへへ、どういたしまして？じゃあね城谷君？」

「ああ、サンキューな」

授業開始まで時間があつたので、

ノートを開くと、そこには小さなコメントが書いてあつた。

『深月ちゃんが放課後に話したい事があるんだって？』  
俺はもう一度、祇条さんの方を見ると、  
その表情は、黒い髪に隠れて良く見えなかった。

## 高嶺に咲く愛の花7

放課後になった。

俺は、部活に遅れると伝え、

急いで祇条さんのところへ走って行って、  
机の前に立った。

「城谷さん、ここじゃ話しづらいので、音楽室へ行きませんか？」

「あ…そうだね。」

午後の斜陽に照らされた教室を抜け、

祇条さんはつかつかと少し速歩きで音楽室へ向かった。

ドアを開けると後ろに片付いた机と椅子が

ひっそりと静寂を招いて、恐かった。

「今日、城谷さんにお伝えしたいのは、愛花ちゃんのことです。」

ピアノに手を掛けてすつくと背を伸ばした祇条さんを

暖かい光が包んでいた。

「ああ、高嶺、思い悩んでるみたいでどうしたのかって…。」

「その事とは別の話もです。」

「え？」

「愛花ちゃんが思い悩んでいる原因のほとんどは、私が持っているんです。」

「それって…どういうこと？」

祇条さんは、それから少し黙ってしまっ

しばらくはその状態だったが

すうっと息を吸い込んでから

静かに口を開いた。

「実は、私、愛花ちゃんと小学校の頃からの付き合いで、彼女は私の影響でテニスをなさっていたんです。」

「うん」

「それで、愛花ちゃんは中学校の時に初めてテニスをなさったのですが、私に一向に勝てず、苦しんでいらつしやったらいいんです。」

「そんな事なら祇条さんも…。」

「いいえ、私はこの学校のテニス部に入れませんでした。」

祇条さんは、ピアノから手を離し窓の外を見た。

「男女混合ダブルスを日常茶飯事に行うなど、私のお父様には考えても見なかったことなのです。」

「じゃあ…。」

「はい、結局私が勝ち逃げでもしたような感じになってしまったのです。」

「そうなんだ…。」

「でも…。」

祇条さんは俺の目を見つめた。

「愛花ちゃんは、私に一度だけ勝った事があつたんです。」

「じゃあ祇条さんは勝ち逃げなんて…。」

「いいえ、でも愛花ちゃんはその負けず嫌いに押し潰されて、私の右手を狙ってスマッシュしたんです。」

「」

「…そんな、」

「私は怪我で棄権して結局、愛花ちゃんが勝ったんです。」

「…。」

「本当は愛花ちゃん、そんな事なさない真つ直ぐな子なんです。」

「…わかつてるけど…。」

「いまでも愛花ちゃんはその事を引きずっていらつしやるみたいで、素直に勝ちに喜べなくなってしまったんです。」

「だから、あんなに暗い顔していたのか。」

祇条さんはごつくりと頭をさげてからまた俺に近づいて来た。  
「もう一つの事なんですけど…」

## 高嶺に咲く愛の花 8

「愛花ちゃん、テニス部に入ってから是一切ダブルス大会にエントリーなさっていないそうなんです。」

「え？どうして…あんなに上手かったら、お誘いくらいあってもいいのに…」

「…そうなのですが、どんな勝ち方をなさってもあまりお喜びにならないので、他の方からは完璧主義者だと思われるようで…」

「そう…なんだ。」

「愛花ちゃんもご自分で他の方と距離を置いていらっしやるので、それも原因なのでしょう…」

「確かに部活が終わった後は独りで帰るし、他の部員とも寄り道はしないし…」

「ええ、愛花ちゃんは規律をしつかりと守る子ですから。」

それからしばらく沈黙が続いたが、

祇条さんは俺を見つめて

何か言いたそうだった。

「え…っと、私がお話すべき事はこれだけです。でも、この事を聞いたからと言って安易に愛花ちゃんに近寄らない方がいいと思います。」

「え？どうして…？」

「愛花ちゃんはこの事を自分で解決したいんです。それに、必要以上の助け舟は彼女にとってまたトラウマの種になりかねませんから。」

「そっか…難しいな。」

「でも道はある筈です。私も頑張っで見守りたいと思いますから。」

「うん？今日はありがとう。モヤモヤが少し晴れた気がしたよ？」



「それは良かったです。では、私もそろそろお時間なので、城谷さんは部活、頑張ってくださいね。」

そういうと

祇条さんはぺこりと頭をさげて

音楽室から出て行った。

「そう言われても、どうしたもんかな…。」

俺はしばらく窓の外を眺めてからバッグを背負って飛び出した。

## 高嶺に咲く愛の花9

「城谷君？」

「え？…あ、高嶺。」

部室の前で帚を握っている高嶺がいた。

「どうしたの？そんなに急いで。」

「いや、どうしてって部活？」

「あれ？今日は部長が御休みだから、部活も御休みなの。聞いてなかった？」

「うん…なんだ、急いで損しちゃったよ。」

俺が切れ切れの息を整えていると、

高嶺は帚を用具室に仕舞い、部室からバッグを持って来た。

「そうだ、高嶺。今日一緒に帰らない？」

「え？…いいけど、私なんかでいいの？」

「うん？高嶺がいいなら。」

「私はいいの…凄く嬉しい…なんて。」

「ん？どうした？」

「あ？その？ごめんなさいなんでもないの？…行きましょ？」

「ああ。」

いままで何度も高嶺と一緒に帰ろうと誘って来たのに、いつも断られてばかりだったので、

お誘いを受けてくれるなんて思っても見なかった。

「ねえ城谷君…。」

「ん？どうした？」

「えっとね…城谷君は下校中に寄り道したりする？」

「ああ、ゲーセンとかウィニングバーガーとか、後は駅前のお店に

「寄る事が多いよ。」

「そう…なんだ。」

「そっか…高嶺は寄り道しないもんね。」

「うん…。」

夕焼けに染まる商店街のアーケードを抜けて  
河川敷を歩いた。

「なあ、高嶺…。」

「何？」

「高嶺がさ、嫌じゃなかったらなんでも俺に相談してよ。」

「え…その…」

「あ、ごめん？出しゃばり過ぎだよね…。」

「ううん…私、そういうのを人に頼るっていう事に疎いから…、誰  
かがこうやって言ってくれるの、待ってたの。」

「そっか、辛い時はお互い様？ね？」

「そっとうと高嶺の顔が少し緩んだ。」

「私、あなたに頼ってもいい？」

「ああ、もちろんだよ。」

「どんな事でも？」

「う…うん。」

「じゃあ…。」

と高嶺は口籠ってしばらく歩いていたが、  
ゆっくりとその口を開いた。

「私と日曜日に動物園に行ってくださいますかっ!？」

「うん?…ってええええ!？」

## 高嶺に咲く愛の花 10

日曜日だ

「やっぱりそういう事だったのね…」

新とわの駅の噴水の前で、

俺は頭を垂れていた。

あの後、高嶺は

「勉強の教え子の付き添いの下見。」

と付け加えた。

「決してそういう意味じゃ無いです。」  
だそうだ。

「はあ…。」

俺がウジウジしていると

高嶺が駆け寄って来た。

「城谷君おはよーーう？」

「おはよう高嶺。」

高嶺は自分の私服にまだ慣れていないのか、  
しきりに方の辺りをキョロキョロ見ていた。

「いい日だね、五月って感じで。」

「ええ、とってもいい天気。当日もこれくらい晴れてくれるといいな。」

「そうだね、じゃあ行こうか。」

「はい？」

俺にとって、女の子とどこかに行く事は未知の体験だった。  
例えばそれが、下見の付き添いでも。

朝のモヤモヤした想いは今はもうとつくに消えていた。  
ただ、それは高嶺と楽しくお出かけする事だからではなく、  
高嶺の力になってあげたいと思ったからかもしれない。

「さてと、動物園に着いたよ。」

「はい？」

「どこ行こつか？」

「ウサギがいいです？」

「え…？高嶺ってウサギが好きなの？」

「あ？ちつ違うの？そう…マミちゃんがウサギ好きなの？」

「へ…へえ…。」

「だ、だからウサギ？ウサギ行こつ？」

「はいはい…。」

半ば強引に高嶺とふれあいひろばに向かった。

夢中になってウサギを見つめる様は

とてもいつもの高嶺とは思えないくらい女の子らしかった。

「ほら？白ウサギ？」

「ははは…餌に夢中で全然降りようとしないぞ？」

「可愛いね？城谷君？」

「ああ、なんだか面白い顔してるなこいつ。」

「ふふつ、口いっぱいにしちゃって。」

高嶺のいつに無い素直な笑顔がとても眩しかった。

そうして、俺達は夕方まで動物園で遊び尽くし、

帰途へつこうとした。

「城谷君…ちょっといいかな？」

「え？」

「うん…あのね、この後丘の上公園に行かない?…なんて」

「別に構わないよ。」

「本当?」

「本当。」

「じゃあ決まりね?」

## 高嶺に咲く愛の花 11

高嶺に誘われて、丘の上公園へ来た。  
紅い夕陽は町を染めて二人を包む。

高嶺は一步前に出て、  
手すりに捕まるとゆらゆらと揺れるみなもを眺めてた。

「城谷君…。」

「どうした？」

「…ダブルスに、」

「ダブルスに？」

「ダブルスでペアになって欲しいの？」

高嶺の目は俺を見てはいなかった。

「ダメ…かな？」

小さい肩をより一層竦ませて、高嶺は小刻みに震え出した。

「高嶺がいいなら…」

俺は一步踏み出して、手すりに手をつく。

「高嶺がいいなら、俺は全力で君とプレイしたい。」

「…城谷君。ありがとう？」

高嶺の瞳が潤んだ。

「なあ、高嶺、一緒に帰らないか？」

「え？…いいよ。」

「今日は寄り道したって問題ないもんな？」

「うんっ？初めての寄り道ね…なんて。」

高嶺は手すりを離すと、

俺の前を歩き始めた。  
黒い髪が左右に揺れて  
なんだか胸が高鳴った。

「どうしたの？」

「あ、いや…何でもない、何でもないよ？」

「ふふ、先に行っちゃうよ？」

「ちょ…待てよ高嶺え〜。」

「ほらほら、ファイトー？とわのっ？」

「おい？いきなり走るなって高嶺？」

高嶺とそうしている内に  
直ぐに商店街に着いていた。



## 高嶺に咲く愛の花 12

とりあえず、俺達はファミレスへ入った。

「あのね、城谷君…。」

「ん？」

「私ってやつぱりお硬いよね？」

「ん…うーん、まあお硬いっちゃお硬いね…。」

「やつぱり、みんなは私がお硬いから、なかなか話しかけられないのかな？」

「そうかもね、でもさそこも高嶺のいい所なんじゃない？」

高嶺はそっぽを向いてしまった。

それからしばらくはメニューがくるまであまり喋らなかった。

「…私。」

高嶺は、アイステイーをストローでカラカラとかき回しながら口を開いた。

「私、城谷君にそう言っただけで嬉しいけど、変わろうと思う。」

「そっか、俺も応援するからさ。」

「でも…私、自身なくて。」

高嶺の目はクルクル回る氷に行っていた。

「少しずつでいいじゃないか、急に変わるのは無謀だよ。」

「…そうよね、ごめんなさい。」

「…明日」

「何？」

「明日、少し寄り道してみないか？」

「それは？…その…速やかに下校って…。」

「じゃあ、明日、“速やかに”少し寄り道してみないか？」

「う…うん。」

高嶺は少し俯き加減で俺の顔を覗き込んだ。

「よし？じゃあテニス部がよく行くウィニングバーガーにしようか。」

「ウィニング…バーガー？」

「ん？高嶺、知らないのか？」

「し？知ってるよ？ウィニングバーガー。」

「へえー、よく行くの？」

「う…うん。」

「…。」

俺は少し意地悪してみようかと思った。

「いやー、先々月のオリジナルバーガー、最悪だったよね？」

「オリジナルバーガー、えつと…。」

「あれ？なんて言ったっけかな？名前出てこないや。」

「うつ…わ…私も忘れちゃった。」

「んー…ほらキムチとビーフンを和えたような…」

「な…なんだったのかな…？」

「高嶺。」

「えっ！？」

「素直になれば？」

高嶺は燃えるように真っ赤な顔になってしまった。

「わざとからかったの？」

「あはは？高嶺の焦った顔を見たら、テニス部の奴らもからかいなくなるよ？」

「もう？意地悪なんだから？」

### 高嶺に咲く愛の花 13

河川敷を二人で歩く。

とつくに日も暮れた道に

街灯が光り、

小さく虫の音が聞こえた。

「私、自分からこうして城谷君を誘えた事が、ちょっと不思議に思えるの。」

「どうして？」

「とても優しくしてくれるから、私、素直になれたの…。」

「俺は高嶺の力になればいいってそう思っているよ。」

「ありがとう…。」

そう言って、高嶺は少し微笑んだ。

「まあ、一緒に帰ろうって言って何度断られた事か…。」

「それは？そう…だけど、男の子と一緒に帰るのって、その…恋人、みたい…なんて。」

「うっ…、そうか、そう言う事に見られちゃうよね…ごめんごめん。」

「でも、一緒に帰り始めてやっぱりこうしている事が幸せに思えるようになったの。」

「高嶺…。」

「は…恥ずかしいね？」

「まあね…。」

二人はまた少し距離を置いて無言になった。  
カツカツと靴が音を立てる。

高嶺の白いワンピースがフワリと風に揺れて、まるでスポットライトを浴びたヒロインの様に漆黒の髪の本一本が光を返した。

「ねえ…城谷君」

「ん？」

高嶺はそう言つと少し口籠った。

河川敷の最後の街灯の下で、

高嶺が歩みを止めた。

「今日つてやっぱり、デートだったのかな？…なんて。」

薄暗い中で、高嶺は俺を見つめていた。

その目は少し戸惑いを持った。

高嶺らしくない目だった。

「あ…あの、ダブルス頑張ろうね？またね？」

高嶺は俺を残し走り去って行つた。

「デート…だったのかな？」

不思議と嫌な感じはしなかった。

## 高嶺に咲く愛の花 14

「お…おい、城谷の奴また酷い事になってるな？」  
月曜日の朝になった。

俺の頭の中は昨日の高嶺の一言で、  
大いに荒れ模様だった。

「大丈夫？」

「あ？ああ…」

「腑抜けもいいとこだな…」

「どうしよう？城谷君が壊れちゃったよ？」

「桜井さん…それは言い過ぎなんじゃ…」

「でも…どうしよう香苗ちゃん？」

「そんなこといきなり言われても…」

三人は俺の席の周りでウンウンと頭を抱えていた。

すると、教室に入って来た祇条さんがバッグを置くと、  
勢い良く走って来た。

「皆さん、どうなさったんですか？」

「あ…深月ちゃん、おはよう。」

「ほら、見てくれよ…城谷の奴。」

「あら？…あの…城谷さんを少し私に貸していただけますか？」

「別にいいけど…なにか心当たりでもあるの？」

「ええ…さあ城谷さん立ってください？」

俺は祇条さんの言われるがままに、  
ゆっくりと立ち上がった。

「皆さんは来ないでくださいね…」

「わかった、ゆっくり話して来てくれ。」

「はい…。」

学校の壁伝いに音楽室まで行くと、

祇条さんはドアを閉めて、

俺を椅子に座らせた。

「お話しした時から一週間も経っていないですよ?」

「う…あっと、違うんだ…。高嶺から俺を誘ってくれて。」

「え?あ…あえっと…そうでしたか、私でっつきり。」

「いいのさ、腑抜けになった顔をしてたら最悪の事態を考えるよ誰でも。」

「すみません…それで、愛花ちゃんは何んと言ってらっしゃったのですか?」

「それが、お硬いのは自分の性だから変わらなきゃって。」

「愛花ちゃんが…ですか?」

「ああ、どうやら高嶺には高嶺の考えがあるみたいで。」

「そうなんですか…。」

祇条さんは少し戸惑ってはいたが、

いずれまた愛花ちゃんも壁に阻まれる事があるから、  
助けてあげてくださいと言って出て行ってしまった。

## 高嶺に咲く愛の花 15

祇条さんはたぶん、高嶺があれば以上ネガティブになる事を恐れているんだ。

だけど高嶺は高嶺で自分から変わりたいと願っている。

俺はその中間でフラフラと彷徨っている。

祇条さんの言うとおりには秘密にしておくべきか、

高嶺の希望のままに全てを知っていた事を話すべきか。

俺は悩んでいる。

「かと言ってまず最初は高嶺のお硬い雰囲気を解くような行動を…。」

俺は体育着を着て校庭の片隅で一人思い耽っていた。

すると、どこからともなく女の子の声が聞こえた。

「あぶなあああああい？」

「え？」

猪突猛進と言わんばかりに

足が絡んで転びそうな少女が目の前に現れると、

彼女はなんの躊躇いもなく、俺にのしかかってきた。

「いつててて…。」

「またやつちやっただ…ごめんね？怪我は無い？」

「大丈夫だよ、君は？」

「あたしは大丈夫？慣れっこだから。あたしは咲野明日夏？さっきはごめんね？」

「いや、心配すんなって、俺は城谷信一。何をしようとしてたの？」

「ああ、アスカターン？」

「アスカ…ターン？」

「そうだよアスカターン？ゴール前で敵の壁を惹きつけるターン何

だよ？」

咲野さんは自慢気に胸を貼った。

「アスカターン…アスカターン あ？これなら？ありがとう咲野さん？」

「うん？またねー」

「これだ？アスカターン？」



## 高嶺に咲く愛の花 16

放課後になった。

高嶺と俺は手塚部長にダブルスのエントリーをして来てから、二人でウィニングバーガーへ向かった。

「さてと入るか。」

「う…うん。」

「いらつしゃいませーっ？ご注文はお決まりでしょうか？」

「あ…っとハンバーガーを…一つ」

「オリジナルバーガーをお一つ、御一緒にドリンクは如何ですか？」

「じゃ…じゃあ、お紅茶」

「アイステイーですね？セットで頼むとサイドメニューがついてさ  
らにお得になりますか以下がなさいますか？」

「あの…城谷君お願い？」

高嶺が涙目で訴え掛ける。

「うえ？お、おう…じゃあウィニングセットを二つでコーラとアイ  
ステイー、高嶺？ポテトとサラダ、どっちがいい？」

「さ…サラダがいい」

「じゃあどっちもサラダで。」

「はい、ご注文を…。」

高嶺ってやつぱりこう言うのに弱いんだと  
よくわかった瞬間だった。

それから、相席でハンバーガーを食べていると隣から聞き覚えの有  
る声が聞こえた。

「城谷君だ？こんな所で会うなんて奇遇だね？」

「さ…咲野さん！？」

「あ、もしかして放課後デート？」

「い、いやーその…。」

「あ、良く見たら、同じクラスの高嶺さん？」

「はい、高嶺愛花です？」

「咲野明日夏です、よろしくね？じゃあ部活の人と一緒にだからじゃね？」

咲野さんに誤解されているようだけど、

高嶺は全く気にしていなかった。

## 高嶺に咲く愛の花17

「なあ高嶺、イメチェンを兼ねてさ、俺ちよつと考えてみたんだ。」  
「え？どう言う事？」

「ほら、高嶺ってさお硬い雰囲気から脱出したいって言ってる？」  
「…うん。」

「きつちりしたイメージの高嶺がさちよつとかawaii子ぶって見るのも有りかと思つて。」

「ど…どうするの？」

「そつだな…こんなのはどうだ？」

俺は少し考えてみた。

「そつだ？こつ、ワオ？つて話の前に言つてみたり…。」

「…うん。」

「じゃあさじゃあさ、アスカターン！！っじゃなくてマナカスマー  
ツシュなんてさ。」

「変かな…。」

「うーん…小キック？」

「小キックって何？」

「あえつと…あああもう、じゃあこれだ？」

俺は左手でピースサインを作つて顔の横に持つてくる。

「オッス愛花だよ？一緒に帰ろう？」

「…無理。」

「えー、高嶺がやつたら大受けだつて？」

「は…恥ずかしいよお」

「まずはものの試しでやつてみたらどうだ？」

「う…うんじゃあ。」

真っ赤になつた高嶺は

ピースサインにした左手をゆつくりと顔に近づけると  
少しうつむき加減で口を開いた。

「お、オッス愛花だよ？いい…いい一緒に帰ろう？なんて…」

恥じらいに潤む高嶺の目に

俺は釘付けになっていた。

「なにか…言って欲しい。」

「あつと…その…ダメだ可愛すぎる。」

「え！？そ…そんなの、その…恥ずかしい。」

「ふふ…あはは、あはははは？」

「ひ、酷いよ？頑張つてやったのに？」

「だって？可愛すぎるんだもんあはははは？」

「だからって笑わなくても？」

「はあくはあくっふふふ…。」

「もう…知らないんだからっ？」

「あちよつとまで高嶺？…行っちゃったか。」

後々これが大いなる事件を引き起こす事になるとは思っても見なかった。

## 高嶺に咲く愛の花 18

高嶺とダブルスを組んで数日後の事だった。

試合を明日に控え、他の部員も練習に打ち込んでいた。もちろんそれは俺達も例外ではなかった。

「ほらちゃんとボール見て？」

「わかつてるよ？」

「後衛はしっかり守って貰わないとダメなんだからね？」

「くっ？高嶺？だからって両端狙わなくても？」

「まだまだ？」

「おおいフェイントとか酷いだろう？」

続いていたラリーが途切れ

ボールは後ろへと転がってしまった。

ポテポテと鈍い音がテニスコートにヤケに響いた。

「今日は終わりね。」

「ああ、明日頑張ろうな？」

「うん」

高嶺はリボンを解くと

解き放たれた髪が、

不思議といい匂いを放った。

サーっと風に靡いた髪を見ていると

高嶺が顔を覗き込んだ。

「顔に何かついてるかな？」

「え！？あ、違う違う？何でもないから。」

「ふふっ、変なの。」

「普通だぞ……。」

「だって顔が真っ赤だよ？」

「うえ！？だから？その？…。」

「ふふっ一緒に帰ろう？」

高嶺の柔らかな口元は

いつもの様に微笑んでいた。

## 高嶺に咲く愛の花 19

「私：どうしたらいいんだろう…。」

城谷君はいつも私に優しくしてくれるのに、私はぎこちない答えしか出せない。

止め処無く流れるシャワーが

いつもより痛く感じる。

悲しいの…。

自分がなんだかわからなくなって来る。

胸が苦しい。

貴方に見つめられてからずっと、

「怖い…私、貴方を失うのが怖い…」

あんなに楽しく、

私が笑顔で居た時間の数だけ

私はその思い出が弾けて消えるのが  
とっても怖い

貴方にとって私は

どういう存在ですか？

私にとって貴方は

まだよくわからないんです。

たぶん貴方もそうなのかな…

まだよくわからない存在

これからもっと貴方といっしょに居たい。

私は私が幸せになる事を

単に勝ち負けで決めていたのかもしれない。

深月ちゃんとのトラウマ

これをちゃんと解決したい

あの日、私が犯した罪を裁いてもらいたい。

「私、強くなれたんだよ…貴方が笑ってくれるから。…城谷君」

私はシャワーを止めて

バスタオルを手にとった。



## 高嶺に咲く愛の花 20

「ねえ、変な質問していいかな？」

「ん？」

リボンを付けない濡れた髪の毛が

少し湿っぽい風に揺れながら

高嶺と俺はいつもの通学路を歩いた。

「別に構わないよ、俺が答えられることなら。」

「ふふ、ありがとう。あのね、城谷君は私の事どう思ってるの？」

高嶺の唇からこぼれる息が

肩にのしかかる様な気持ちがあつた。

「…高嶺は…」

高嶺は…、高嶺は俺にとってのなんだ？

高嶺は友達だしテニスの仲間だしペアでもある。

だけど

「高嶺は俺にとっての…」

「…なさい…」

「え？…」

「ごめんなさい、いきなりこんな事訊いて…城谷君も迷っちゃうよね？」

「あ、あの…」

「私もわからないの…城谷君は私にとっての何なのか。だから訊いてみたかった。どうすればいいのかわからなくて…」

「…高嶺、」

高嶺の肩が震えた。

どうしてだろう

心が罪悪感で満たされていく。

俺は高嶺をどう思っているなんて考えた事も無くて、  
高嶺を気にしていた癖に、俺が一番高嶺を見てあげていなかったじゃないか。

「高嶺…ごめんな…俺が、俺が」

「城谷君…私、」

不意に俺にかかる風を感じた。

俺の胸に、柔らかい圧力があつた。

「高嶺…」

「怖い…自分を変えることが怖い…過去を引きずって幸せになるのが嫌なの！！誰もいなくなっちゃうのも嫌なの！！城谷君…私…」

「…高嶺、高嶺は俺の……。」

俺の決意は高嶺の涙に掻き消されて、おそらく高嶺には聴こえなかった。

本当に高嶺は変わろうとしている。

徐々に湿ってゆくワイシャツの暖かさが

俺の鼓動を速くした。

## 高嶺に咲く愛の花21（前書き）

どうもこんにちは、作者の f a f u n a r v です。

ええ、停滞していたことお詫び申し上げます。

なんで出て来たんだよって言うんですね、次回ヒロインの投票について

また懲りずに宣伝しに来た訳です。

えー

ただいま、アマキス・プラス+では次回のお話で書いて欲しいキャラを投票形式で大募集中！！

一人持ち票を三票として、次回のお話で書いて欲しいキャラの後に何票入れるか感想欄にご明記ください。

一番多く票を集めたキャラを順にお話を書いて行こうと思います。

（決して感想を貰って知名度を上げたいとか作者のヨコシマ作戦ではないので、ドシドシ投票お願いします！！）

よくわからない人は高嶺愛花編16話17話の前書きをみてくださいさいね？

ではグッバイ

## 高嶺に咲く愛の花 21

「泣くと結構スッキリするね。」

「そうか、少しは力になれたんだな良かった良かった。」

高嶺は近くの公園で腫れぼったい泣き顔を一生懸命洗いながらそう言った。

変わろうとするのがとても怖いと高嶺は泣いていたけど、本当に怖いのは変わった後のはずだ。

オッス愛花だよ作戦も、決行する時によっては  
思わぬ逆効果を発揮しかねない。

元は俺が始めたんだが…

「ねえ、今日は何処に行こっか？」

「寄り道も板に付いて来たな。」

「こういう事ってなんだか昔やらなかった分、ぶりっかえしてるみたいで。」

「はは、そうかじゃあゲーセンでも行くか？」

「え？ゲーセン…ってゲームセンター？」

「ああ、嫌か？」

「ちよっと怖いかな…なんて。」

「大丈夫大丈夫、この時間ならヤヴァイ人いないし。」

「うん、ものは試しで行こう行こう！！」

高嶺は苦笑いしながらも

嬉しそうにくつついて来た。

ゲーセンには高校生が沢山いて、見るとテニス部の部員までいる。

「すごい…キラキラしてるね。」

「まあね、初めてだと目が疲れちゃうかもね。」

「うん、でもちよつとうるさいかな…。」

「そっか、じゃあ今日は音ゲーはなしにしよう。」

「音ゲー？」

「ああ、音楽ゲームだよ、CONAMIのポップスミュージックって言うのをよくやるんだけど、今日は格ゲーに変更だな。」

「格闘ゲームだよな？私も小さい頃、近所の男の子がやってるの見たことあるよ。」

「おおそれなら話が早いな。よっと…これにするか。」

「人がやってるんじゃないの？」

「はは、今は反対側の台でやってるんだけど、こっちの台にお金を入れると…」

『HERE COMES A NEW CHALLENGER!!』

「ってね、勝負を吹っかけられるんだ。」

「へえ…。」

俺はいつものお面の侍のキャラを選ぶと、

相手の赤い服の大剣使いとのバトルが始まった。

「城谷君…頑張つて。」

「お…おう、」

高嶺はたかがゲーム画面を食い入る様に見つめていた。

「とりゃ…!!」

「せいや…!!」

「いつけー必殺!!疾風!!」

とまあ圧勝して高嶺に良いところを見せる事が出来た。

「城谷君すごい、このキャラを使いこなしてる。」

「まだまださ、もっと強い奴はいっぱい…」

と勝者面でかつこよく決めようとしたのに、  
今度は向こうから吹っかけられてしまった。

「もーあんな情けないんだから、あたしにかかればチヨイチヨイよー!」

「薫：結構強いぞ相手。」

「うつさいっわね、わかってるわよ!」

「なんだか向こうが騒がしいが」

「そうこうしているうちにまたバトルが始まった。」

「またあの赤い服の大剣使いだ。」

「今度は色を変えて緑色になっている。」

「城谷君、もう一戦するの?」

「ああ、吹っかけられちゃったらどんなバトルも最後までやり遂げないとな。」

「と逃げの口実を作っておいて」

「バトルが始まったが」

「あつという間全部片付いてしまった。」

「負けちゃったね…」

「ああ、それじゃキリも良い所だし帰るか。」

「うん、でも次は私もやってみたいな…なんて。」

「そっか、じゃあその時はしっかり鍛えるからな?」

「ふふ、お願いします。」

## 高嶺に咲く愛の花22

日曜日

ダブルスの試合当日は晴れ渡っていた。

「高嶺、よろしくな？」

「はい！！よろしくお願いします！！」

高嶺と俺は自分達でも上手いと言えるくらい上手な攻防を繰り広げた。

俺は高嶺のカバーに徹し、高嶺は相手から点を奪って行った。

完封勝利を連発する俺達を止めるものはいなかった。

準決勝まで上り詰め、ついに俺達は三年生のペアとの対戦が始まるうとしていた。

「ナイス高嶺！！」

「うん！！ファイトファイト！！」

二人が交わすハイトタッチ、これで何回目だろうか

一緒にベンチに座り、一息ついていると高嶺のクラスメイトだろうか、

茶髪のそばかす少女がやって来た。

「高嶺つよいじゃーん、もちろん、ペアの子も強いけど、私ダメダメだったなあ」

「あ、英子ちゃん、彼が前言ってた城谷信一君だよ。」

「初めまして、城谷です。」

「よろしくね、私、三好英子！！高嶺のクラスメイト。」

「ああよろしくな？」

「でさでさ、高嶺が最近城谷君がねー城谷君がねーって話すからどんなもんだと思ったけど……」

俺は口になっていたスポーツドリンクを吹いてしまった。

「ありゃー、高嶺があんたの話してるって聞いて照れてるんだー。」  
「もう英子ちゃんからかわないでよー!!」  
「ふふ、お二人でこゆっくりどうぞー」

真っ赤な顔になった高嶺がいた。

口をモゴモゴさせて、何かいいたそうだった。

「よ…良かったじゃんか高嶺？」

「ふえ!? あ…あははは…。」

「友達出来て良かったな…それなら、テニス部のヤツらだってきつと高嶺の友達になれるさ。」

「…城谷君。」

「少しずつでいい、俺が側にいるから絶対諦めんなよな。」

「ふふ、はい!!」

「よしっ!! どんなバトルでも最後までやり遂げるのが筋だ!! 行くぞ高嶺っ!!」

「オッス!!」

高嶺の目はいつもと何か違うような気がした。  
準決勝のホイッスルがテニスコートに響き渡った。



## 高嶺に咲く愛の花23

「やり遂げたよな…。」

「しょうがないよ良く頑張ったから。」

「ありがとう高嶺、足引つ張ったのは俺なのにな、はは…。」

「だって相手は部長ペアだったし。」

俺達はベンチにヘタレ込んでいた。

完封負けだ。

手も足も出ないままあっさりと。

しかし高嶺は笑っていた。

いつも負けた時は悔しそうな顔をする高嶺には似つかわしく無いくらいに満面の笑みだった。

「私、やっとわかった。」

「ん？どした…。」

「負けて悔しかったけど、最後まで全力でやり遂げる事がこんなに気持ちいい事だなんてわからなかった。」

「そっか、俺は高嶺とペア組んで二週間、そっちの方が楽しかったぜ。」

「え？…あ、うん。ありがとう…。」

高嶺は俺の肩に頭をもたれかけると

無言のまま部員が集まるテニスコートを見つめていた。

やっぱり女の子なんだと思えるような、

甘いいい香りが二人を包んでいた。

高嶺の小さな手に、さりげなく自分の手を重ねた。

高嶺の暖かさが伝わる。  
不思議な気持ちだった。  
高嶺に対するこの気持ちは  
強くなるばかりだ。

「城谷君…。」

「ん？」

「城谷君にね、もう一回抱きしめて貰いたい…。」

「高嶺…。」

「今日、みんなにアレやってみる。」

「…本当に？」

「うん、だからもう一度抱きしめて。」

俺は高嶺の肩を引き寄せ、  
その不安を俺が少しでも拭ってあげたい一心で  
強く高嶺を抱きしめた。

## 高嶺に咲く愛の花24

夕方

日が傾き、部員達は着替えながら打ち上げの話で盛り上がっていた。  
「なーどうする？もんじゃの隅田川にすつかー！」

「えーメンラー行こうメンラー！！」

「なあ、城谷の為の打ち上げだぜ！！城谷に案を言って貰えよ！！」  
「俺か？うーん、ファミレスのデキシーズでいいんじゃない？」

「さっすがだぜー！デキシーズ、女子も行くんだってよー！！」

「マジかよー合コン状態じゃんか！？」

「よーしそうと決まればペアの子を落としてやんぜー！！」

「おいいきり立ってんなあ、俺もそうすっかな。」

「城谷のペアは…高嶺か、残念だったな、今日も来ないぞ。」

「はは…わかってるって。」

高嶺にまだそんな見方が植え付けられたままなのは少しさみしかったけど、

俺はこれから起こる衝撃的な事件を目の当たりにしたこいつらが驚く様を想像して笑ってしまった。

いち早く部室を出ると、

高嶺が校門で待っていた。

「あ…城谷君。」

「高嶺、頑張れ、俺が応援してるから。」

「うん、ふう～…」

「ほら来たぞ。」

「えあつ…み、みんなー！！」

「え？高嶺？」

「愛花ちゃんじゃーんめっずらしーな」

「あの…その…」

呼び止められた部員達は

高嶺から声をかけたのが珍しかったのか、  
ジッと見つめていた。

「あの…！おっ…オッス愛花だよ！！一緒に帰ろう？…テヘ？」

高嶺はもう顔から火が吹き出る様で

決めポーズを取りながら固まってしまった。

「高嶺…かつ…可愛い…！！」

三好さんが叫ぶと男子も女子も

高嶺の周りに寄って来て、

それはもう弾け飛んだかのようなお話責めになってしまった。

「良かったな高嶺。」

「うん、城谷君のおかげね。」

にっこりと笑顔を浮かべて

半泣きの高嶺と共に

打ち上げに向かっていった。

## 高嶺に咲く愛の花25

打ち上げの後はなんだかんだでペアの人と過ごすだの言い始めた奴がいたので、

高嶺と俺は二人きりで夜の街に繰り出した。

「ね、今日もゲームセンターに行かない？」

高嶺は嬉しそうにこちらを覗きこんだ。

「いいよ、今日もコテンパンにやつつけてやる!!」

「あ…それなんだけど、私はやってみたいなって…。」

「おっ!!高嶺やるのか!？」

「うん、よーし頑張るぞーなんて!!」

高嶺は五百円を百円に崩すと

昨日いた台に座った。

ちようどだれもいなかったみたいで

コンピュータとの対戦が始まった。

高嶺は見た目で選んだのか、

白装束の羽根の生えた帽子を被った少女をえらんだ。

「したにコマンドの入れ方が書いてあって、ここのとこの表を見ればこのキャラの必殺技になってるから。」

「う…うん。」

高嶺は一生懸命コマンドを入れて必殺技を連発させていた。

空中から相手に突っ込んだり、

アップーをかけたりと、三回戦目で早くもこつを掴んだのか、

ノーダメージで相手を倒した。

「凄いぞ高嶺!!」

「…」

「高嶺？」

「…」

「高嶺さん？」

「…」

高嶺はもうゲームだけに目が行ってるようで、全く話を聞いてくれない。

俺は仕方なく反対側の台にお金を入れると高嶺をやつつけてしまった。

「あれ？城谷君！？城谷くん！！」

高嶺はやつと周りが見えたのか必死になつて俺を探していた。

「こつちだ高嶺え…。」

「あー！ひつどーい、一生懸命頑張つてのに！！」

「話聞かないから」

「もー！！もう一回やるもん！！」

「よし望む所だ！！」

## 高嶺に咲く愛の花 26

次の日、

祇条さんに呼び止められた。

「城谷さん、愛花ちゃんが私ともう一度テニスがしたいと言ってく  
ださいました。」

「そうなんだ、昨日？」

「はい、お電話いただいて、是非次の日曜日に私の別荘でやりまし  
ようとお返事致しました。」

「べ…別荘ねは…いいなあ。」

「あ、その件なのですが、城谷さんも一緒にいただきたくて。」

「え？俺も？」

「はい、城谷さんに見守っていて欲しいと愛花ちゃんは思っている  
筈です。」

「そっか、そう言う事なら俺でよければお邪魔させてもらうよ。」

「はい、お待ちしております！！」

そういうと祇条さんはペコリと頭を下げて席に着いた。

「なんか良い雰囲気だね、城谷君。」

「桜井…俺はそんな見方してないぞ？」

「違うよー！！高嶺さんと城谷君だよー！！」

「え？そ…そうか？」

「うん！！オッス梨穂子だよ！！一緒に帰ろう？」

「ブッ！！」

桜井がオッス愛花だよを知っているって事は  
もしかやテニス部の誰かが漏らしたんだな！？

「どうしたの城谷君？」

「桜井…それ誰に教わったんだ？」

「棚町さん!!」

「…た…棚町ってああA組の…どうして!!」

「うーんとね、テニス部の友達がいて、その子がやってたから真似したんだって!!」

「やっぱりテニス部かよ!!」

「で、さっき高嶺さんが廊下で待ってたよ!!」

「そっちを早く言ってくれよ桜井!!」

ドアを見ると

高嶺が手招きをしていた。

「ごめん高嶺!!今行く今行く!!」

高嶺は俺の手を取ると

こっ切り出した。

「私ね、全部ケリをつけようと思う。」

「わかってる。もう全部知ってるから大丈夫。」

「え…じゃあ。」

「過去の過ちを取り返してくるんだろ？」

「うん…。」

高嶺はフツと胸に飛び込んだ。

数秒で離れてしまったが、

高嶺の目からは戸惑いが消えていた。



## 高嶺に咲く愛の花 27

その一週間は高嶺のカマしたオッス愛花だよがとてつもなくプレイクした。

高嶺の顔からは自然と笑みがこぼれ

毎日はとてもゆっくりしたペースで流れた。

「オッス愛花だよ!!」

「よう高嶺、今日も一緒に帰ろうか。」

「うん!!」

高嶺は今日はどんな人といろんな話をして

どという発見をしたとか、今度はどこに連れて行って欲しいとか熱心に俺に語ってくれた。

その度に駅前のトトスやデキシーズといったファミレスからウィニングバーガーだの学校販売だのと

高嶺と俺の時間はますます増えて行き、

その度に高嶺は明るくなった。

「今日は、思い出の場所によって行こう?」

「ん? まあいいよ。」

「ふふ、ちよつと遠くなるけどいいよね。」

「お硬い高嶺様には珍しい。」

「んもう!! 速やかに寄ればいいんだもん。」

「へいへい。」

商店街を抜けて丘を登り

あの日見た丘の上公園のあの景色に辿りついた。

「覚えてる？」

「ああ、覚えてるさ。」

俺たちにはそれだけで良かった。

動物園の帰り道

高嶺が俺にダブルスの誘いをした日

覚悟を決めた高嶺の顔を

俺は今でも思い出せる。

高嶺は静かに俺に寄り添った。

フワッと良い香りがして

第二ボタンまで開いたワイシャツの中に

高嶺の髪の毛が入り込む。

「城谷：君。」

頬が触れ合い

徐々に高嶺の顔が近づいて来る。

熱い吐息が絡み合い

二人は静かに唇を重ねた。

まだぎこちないキス

二人は口を離してから見つめ合い

何も言わずに帰り道を歩いて行った。

影法師の距離が

何時もより遠く感じた。

## 高嶺に咲く愛の花 28

日曜日だ

祇条さんの別荘に招かれ

俺たちは大きなテーブルを囲んで食事をしていた。

「城谷さんに愛花ちゃん、今日は私の別荘に御来訪くださいましてありがとうございますですね。」

「私が誘っておいて別荘借りるのも申し訳ないから、でも嬉しい。」

「ああ、ありがとうございます、俺も招いてくれて嬉しいよ。」

「はい、ではお食事がすみましたらどうぞお庭に来てください。」

祇条さんは部屋を出て行ってしまった。

高嶺もご飯が済んだのかごちそうさまと言って更衣室に入って行った。

「城谷様、殿方のお召し物の更衣所は左てにございます。」

「ありがとうございます。」

メイドさんはそう言うところそくさと出て行ってしまった。

仕方なく俺は着替えをする為に更衣室に入って着替えをしてから急いで庭へ駆け出した。

そこで、高嶺と祇条さんはすでに試合を始めていた。

続くラリーー

鮮やかなスマッシュ

それを打ち返してなおの粘り

二人とも互角に闘い  
あの高嶺でさえゲーム一つ取るのもやっとだった。  
1-1で迎えた最終ゲーム。

試合は両者譲らない白熱した闘いが繰り広げられていた。  
デュースに持ち込み  
二人のアドバンテージ争いが始まった。

高嶺がアドバンテージを取ると  
祇条さんが阻止して  
祇条さんがアドバンテージを取ると  
高嶺が阻止した。

三十分続いたアドバンテージ争いは6回目を迎えた。

「えい!!」  
「そりゃ!!」

高嶺のアドバンテージ  
祇条さんの一瞬の隙を高嶺は見逃さなかった。

「えーい!! マナカスマーッ シュ!!」

高嶺渾身の一撃がコートに叩きつけられた。  
パンッ!!  
と激しい音と共に  
ボールは宙を舞った。

「ゲームセット!! カウント2-1!! マッチウオンバイ!! 高嶺

「!!」

高嶺がコートに突っ伏した。

祇条さんはただ笑いながら高嶺に寄り添い  
過去のトラウマを振り切った高嶺のか細い体を抱きしめた。

「高嶺、頑張ったな。」

「城谷君：私い」

「泣くなよ高嶺、いいじゃんか笑えよ。」

「うんっ!!」

高嶺のあの時の笑顔を俺は忘れない。

## 高嶺に咲く愛の花Fin

「ハアハアハアハア…。高嶺!!」

「オッス…。し、城谷君…。」

「うえーいヒュッヒュー。」

「熱いね色男。」

「高嶺、頑張りなよ、んじゃこいつら連れてくからさ。」  
「う…うん。」

「つたく、なんなんだよあいつら。で高嶺、話…。」

「えっとね、城谷君…こっち来てくれない？」

「あえつと…なんだよ高嶺!!」

「いいから、ね。」

「つたく。」

「ふふっ…ねえ覚えてる？」

「ああ、初めて会ったゴミ箱前だな。」

「もう酷いよ城谷君、ゴミ箱が初めて出逢ったトコなんて言わないで。」

「じゃあ掃除用具箱の前ね。」

「んーっ…。」

「悪かったよ…、俺がなテニス部の入部届けを高嶺に渡したトコな。」

「…。」

「まだ怒ってる?」

「…怒ってないよ、あのね」

「ああ、」

「あの…ね」

「…。」

「私、今日英子ちゃんに告白するからって言ったんだけど…。」

「え?高嶺って三好さんのことが…。」

「うっん…そういうのじゃなくて、私が貴方に…。」

「私は貴方を好きって。」

「高嶺…。」

「私、そう言いたかった。ずっとずっとそう言いたかった。」

「高嶺…俺が前に高嶺に言ったことたぶん聞こえてないと思うけどさ。」

「うん。」

「あの時俺は高嶺は俺の大好きな人だってそう言ったんだ。」

「え…じゃあ」

「高嶺…大好きだよ。」

「うん…！信一君…！ずっとずっと私のパートナー…！」



## 高嶺に咲く愛の花Fin（後書き）

つとまあ、高嶺愛花編お楽しみいただけたでしょうか？

次回は作者がやりたかった悪ノリを挟んで棚町薫編スタートです！！  
随時キャラ投票を行っていますから  
どうぞご参加よろしく願います。  
では次回またお会いしましょう！！  
グッバイ！！

## 次回予告

「オッス薫だよ!!一緒に帰ろう?」

「あー、棚町さん!!ネタの横取りはダメですよ!!」

「お!!愛花ちゃん彼氏君とハッピーエンドかーイイなあ。」

「そ…そんな」

「ま、あたしもちよびーーーーーっとお邪魔させて貰ったから  
いいかなー。」

「え?でも次回は棚町さんのお話ですよ?」

「え?えええええええええ?マジ?」

「はい、マジです。」

「どうしよう…私どんなストーリーにされるのかなあ…。」

「作者さん次第ですよね。」

「そつよねえ、まあそういう事で次回棚町薫編、頑張るわよー!!」

## 男主人公たちの詳細プロフィール（前書き）

この章ではキャラクター達の絡みを重視した短編ストーリーを載せて見ました！！

甘ったるい恋物語のスパイスになれば幸いです。  
まずは設定資料公開から。

## 男主人公たちの詳細プロフィール

組順です

橘 純一

クラス：2年A組

部活：なし

誕生日：12月14日

星座：射手座

家族：父・母・妹

通学手段：徒歩

年上好みで、高いところが苦手。

主にアマガミのメインキャラクターのお話を担当。

一人称は「僕」。

2年前、告白した女の子からクリスマスデートの約束をすっぽかされて失恋したという苦い経験があり、それ以来恋愛やクリスマスに対して苦手意識を持っている。

自宅の押入に蛍光ペンで書き入れた自前のプラネタリウムを持っており、ひどく落ち込んだ時にはそこへ引き籠もる癖がある。

人目に付かない校内の未使用室を隠れ家として「お宝本」を秘蔵している。

また、ゲームや漫画好きで、放課後はしばしばゲームセンターを訪れ、妹が持つ少女漫画も愛読している。

妹の美也に対しては、色々と手を焼きつつも結局甘やかす事が多い。

城谷 信一

クラス：2年B組

部活：テニス部

誕生日：4月6日

星座：牡牛座

家族：一人暮らし

通学手段：徒歩

自炊を始めとする家事全般を卒なくこなす

遅刻や欠席の目立たないが頭は中位。

一人称は「俺」。

弁当を持つ事は少なく、学食を頼る事が多い。

主にラブプラスのキャラクターのお話を担当する。

お兄ちゃん肌でしつかりもののようで、

実はあまり人の気持ちが理解出来ない。

その為、後先考えずに行動する癖に対した結果がついてこない。

人の勧めを断れずにズルズル掛け持ちまでしてしまう。

包容力があり、困っている人を助けなくては気が済まない。

相原 光一

クラス：2年C組

部活：なし

誕生日：8月22日

星座：獅子座

家族：父・母・妹

通学手段：徒歩

まだキスの味も知らない少年。

主にキミキスのメインキャラクターのお話を担当。

一人称は「僕」。

夏休みが終わり、高校生活もあと半分を迎えた事と、恋愛もせずに卒業してしまう事に危機感を持ちながらも、一歩踏み出せないでいる。

お弁当などを持参する事が多いが、学食に顔を出す事もしばしばある。

ここぞという時の決心が付かずに優柔不断な状態に陥りやすい。

妹の菜々からは強いアプローチをされる事もあるが、スパルタ教育

を強いることが多い。

草壁 総一

クラス：2年D組

部活：なし

誕生日：10月28日

星座：蠍座

家族：一人暮らし

通学手段：電車

二年生からの転校生で不思議な空気を醸し出す。

担当タイトルは未定、サブキャラやオリキャラのお話を担当する予定。

有名私立高校からわざわざ転校してきたが、その意図や動機は不明。

## GO TO ATAMI!!

栗生恵の場合

「おはよう栗生さん!!」

「おはよう相原、今日はちゃんど遅刻しなかったなよかったよかつた。」

「ああ、でこれ栗生さんに...」

「ん? 熱海旅行ペアチケット...」

「あ、ああ...」

「この不順異性交遊男め!!」

「んにゃー...あ!!」

桜井梨穂子の場合

「あ、純...」

「梨穂子か、ちょうど梨穂子に会おうと思ってな。」

「へ? 私に?」

「ああ、熱海旅行ペアチケット。」

「うん!! 行ってみるよ!!」

当日

「えー!!...なんで純と二人つきりなの!!」

「ペアですから...」

「そっか。」

祇条深月の場合

「祇条さん!! 熱海旅行ペアチケットが当たったんだけど、行かない?」

「あ、相原さん。熱海旅行ですか、確かあのホテルのスイートがつても...」

「僕にプレッシャーをかけないでくれ…。」

二見英理子の場合

「何相原、私に用？」

「ああ、熱海旅行ペアチケットが当たったんだけど、二見さんと熱海旅行行きたいなって。」

「そう…いいわよ。」

「え？本当？」

「その代わり、何かあったら貴方の自己責任よ。」

「…実験するんだね？いろんな」

絢辻詞の場合

「絢辻さん、ちょっと話があるんだけど。」

「何よ…手短にしなさいよね。」

「はいはい、熱海旅行ペアチケットが当たったから一緒にい…」

「みなさー…んココに変態がいますよー。」

「やめてよもおお!!」



## 美也と英理子の三分クッキング

「みゃーとー!!」

「二見英理子の…」

「三分クッキング!!」

「にししー二見先輩!! やつとみゃー達も出番がきたね!!」

「そうね、次回も貴方はともかく、私は無さそうだからココで宣伝するのがいいわね。」

「うん!! みゃー達最初の企画は先輩と一緒にクッキングすることなんだって。」

「ネタに走るだけと思うけど私たちは全力でやりましょうね。」

「はいっ先生!! でも…今日は何を作るんですか?」

「今日はロールキャベツを作るわ。」

「え? 先生ーロールキャベツって手間がかかるじゃないですかー」

「そうね、でも私にかかれば合理的にロールキャベツを作るわ。」

「さすが先生!! にっしし」

「じゃ、作りましょうか…。」

二見先生はフライパンに油をひき、キャベツと豚肉を手にとった。

「じゃあ、焼いていくわよ。」

「はあ…本格的…」

「ロールキャベツはわざわざキャベツに具材を巻くから手間がかかるのよ。」

「先生合理的!!」

「ふふっありがとう。」

そう言うと二見先生は水を入れて蓋をした。

「ほえ？蒸すの？」

「そうよ、少し蒸すと美味しいの。」

「へえ。」

かくして

味音痴先生と壊滅的アシスタントの料理は続く。

「ここに隠し味で豆板醤を入れるわよ。」

二見先生は豆板醤の蓋を開けると

これでもかと豆板醤を叩き込む。

「美味しそうだね先生！！」

「そうね、あとは煮込めば出来上がりよ。」

完全にロールキャベツの原形を失ったそれは

そう兄、橘純一の部屋に運ばれて来た！！

「にいにー！！みゃーと二見先輩の力作だよ！！食べてー！！」

「遠慮しなくてもいいぞ橘。」

「うえ…お…おう。」

橘は恐る恐る箸でキャベツと肉を掴む。

「えーい、ぱくっ！！」

「どう？にいに？」

「どう？橘？」

「うん美味い！！」

「本当！？」

「ああ本当に美味いよこのホイコーロー！！」

## 執筆裏話

えー

俺がですね、このアマキス・プラス+を書いている時の裏話っす。

ちょうど15話くらいを書いている時に

まあふと投票企画を思いついたわけで、

さっそく16話前書きに記載した所一つしか投票されていない事に愕然としましたね。ええ…

本気で次回ヒロインに悩んでいましたねあの時。

結局棚町が次回ヒロインに決まって解決したんですが…。

今も投票は継続中なので、小説の紹介みたいな所をよく読んでご投票お願いします。

と

別の話なんですが

友人がこれを見まして、

「オリキャラでないの？」

とかなんとか言っちゃうわけですよ。

まあ二次創作ですし、オリキャラいいや空気を醸し出していたのですが、

正直な所ちよつとアリかなーと思う今日この頃ですね。

そんでもって致命的なのが

アマガミのゲーム版のストーリーを知らない

と言う事なんですよ。

一応、某ワニマガジンさんで連載中の漫画を資料にして

一生懸命棚町編のストーリーを練り上げているんですよ（わら）

高嶺編よかストーリーが作りやすいのが本音なんですよ。

アマガミやキミキスは比較的他キャラと絡む機会が多いんですがラブプラスは他キャラとまったく絡まないんですよ。

かろうじてこう言うストーリーが出来たんですがねえもっと修練すべきですね

では次回からは棚町薫編

開始です！！

全力で頑張りますよー！！

## He is something in between・1（前書き）

棚町 薫《たなまち かおる》

クラス：2年A組

部活：なし

血液型：B型

年齢：17歳

誕生日：8月1日

星座：獅子座

好きな事：明るい雰囲気・恋愛の話・悪ノリ・甘い物・炭酸飲料・

掃除洗濯・新発売や季節限定など目新しいもの

苦手な事：暗い雰囲気・退屈・ノリの悪い人・カエル・中学時代の

あだ名・試験やテストなど試されること・あやふやな物言い・勉強

家族：母

通学手段：徒歩

橋純一とは中学校からの腐れ縁で、ツツコミ役。

サバサバした男勝りな性格で、誰にでも分け隔てなく接するので友人が多い。

絢辻詞とは、クラスの男子達の間で人気を二分している。

流行、おしゃべり、イベントが大好きで、何にでも首を突っ込むトラブルメーカー。

そのため中学時代は「輝日東の核弾頭」というあだ名が付けられた。幼少時に父を亡くして以来、母子家庭で育つ。

今時の女子高生に見えるが、放課後はバイトに明け暮れており、家計の足しにしているほどしっかりしている。

オシャレで非凡なセンスの持ち主であり、特に絵画に関しては、教師達からも一目置かれている。

「はふうゝ…。」

二学期が始まり一ヶ月が過ぎようとしていた。

秋の匂いがこの気怠い教室を更に怠慢させるように  
僕もボケボケ頭で朝から机に突っ伏している。

妹の美也が朝からみゃーみゃーうるさいから  
こうして学校の机でなら安心して寝ていられる。

「ヤッホー!!」

ドサツと重たい物が背中にのしかかった。

「純ー!! まったくだらけんじゃないわよ!!」

「あ…ああ、あんだよ薫う寝てんのに…。」

僕は寝ぼけ眼で背中に擦りつく女の子  
棚町薫を見つめた。

まったく朝からひどい物だ。

「ほーら、シャキツとしなさいよもう!!」

「やだ…。」

「はう!!」

一向に気の向かない僕を見て

薫は急に頭を抱えた。

「純一ったら…あたしの事なんかもうどうでもいいのね…。」

「…薫。」

「よよ…それは奇跡の出逢いだっただわ…あの時愛を誓い合ったはず  
なのに、もうあたしに興味がないと言うのね。」

「あーあのー？薫さん？」

「さんざんあたしを弄んで捨てるのねー。」

「だーかーらー薰う!!」

「よう大将…ありや？今日の夫婦漫才はだいぶシユールじゃんか？」  
後ろから幼馴染の梅原正吉が顔を覗かせる。

「そうなのよー、純一があたしには飽きたからって…」

「な…それは可哀想に…まったく大将も趣味が悪いやい…」

「わかってくれるのね梅原…ああ、純一はあたしを愛してくれないのねー。」

「もうやめてくれよー…。」

こうやって僕と薰はいつものように悪友として  
時間を過ごしていた。

「ねえ…いい加減やめてもらえない。」

授業が終わり、ひと段落ついて廊下に出た所にC組からツインテールの女の子が歩いて来た。

「え？えっと…どういう事ですか？」

「朝から不埒な喋り声が毎日毎日聞こえて来るって苦情も来ているのよ。」

「あの、僕が何か…。」

「あの棚町って人と毎日変な事してるわよね。」

「薫…げっ！！あの声、聞こえてたんですか？」

「あたりまえよ！！で、あなた、名前は？」

「橘純一です。」

「そう、風紀を乱す者は容赦しないからね橘君。」

「…はいすみませんでした、えーっと。」

「栗生めぐむよ…。」

「はい、気をつけます栗生さん。」

「フンッ！！」

栗生さんはプリプリ怒りながら帰って行ってしまった。

すると、見計らったかの様に薫が隣に走って来た。

「ふーっ、あんたが廊下に出たからチャンスだと思って飛び掛ろうと思ってたのよねー。」

「飛び掛ればよかったじゃないか…。」

「言ったわねー、でもあたしが被害受けそうだからパス！！」

「ま、栗生さんに名前を覚えられてたしな。」

「うっさいわね、元気を持て余し過ぎただけよ！！」

「はいはい…。」



僕は笑って薫の方をチラッと見た時だった。

薫は僕と反して珍しく真面目な顔でこちらを向いていた。

目が合った瞬間

僕も薫を少しドキッとしたのか、

音がするくらい素早くそっぽを向いた。

しばらく無言で窓を見ていたが

薫はいきなりこう切り出した。

「今のさ、あたし達の関係って変えたくない？」

「へ？」

「だからさあ、毎日バカやってる友達関係とかさ、もっと進展させたくないワケ？」

「いや、話の意図が僕には見えて来ないんだけど。」

「んもう鈍臭いわね！！」

薫はバシッと背中を叩いた。

「イッターアアア！！」

「絶対変えてやるわ！！」

そう言うと薫は教室に入って行った。

放課後になった。

急に読書がしたくなる衝動に駆られた僕は、梅原と別れ、一人図書室に向かった。

夕暮れの図書室で本棚を眺めながらブーツと突っ立っていた。特に面白い本は無さそうだが、気になるタイトルがあったので取ってみた。

「あ…。」

不意に後ろから小さな声が聞こえた。

「ん？」

僕が振り向くと一年生だろうかショートの女の子がこちらを見ていた。

「もしかして読みたかった？」

「…別に、アタシは興味ない。」

「そっか、ごめんな。」

「あ…それさ、別の場所の本だからリン、ア…アタシが返すから。」  
「そういう事だったか、わかったよ。」

僕は近くの一人掛けの椅子に座って、ゆっくりと最初のページを開いた。

それから、どれくらい経っただろうか、

僕はあのショートの女の子の声で我に返った。

「もう下校時刻だから、早くして…。」

「あ…ごめんごめん、つい夢中になって。」

「まったく、そんなおちゃらけた恋愛小説がなんで人気なのか、わかんないし。」

「これ嫌いか？」

「あたりまえじゃん！！リンコ、そんな男なんか望まないし。」

「リンコ？」

「う、うっさいなー！！早く帰れ！！」

「おおおいちよつとお…。」

僕はリンコと言う女の子に図書室から追い出されてしまった。

「はあ…そんな男…か」

あの小説の主人公

僕のそれとまったく似ていて面白かったのに、

女の子にとって僕は望ましくない性格なのかもしれない。

恋愛の失敗を引きずって

最終的に女の子に気づかされる。

そんな恋愛を僕は心の中で望んでいたのかもしれない。

涼しい風が僕の背中を押す。

輝日東の駅前アーケードを抜ければすぐ自分の家なのに帰る気が起きなかった。

「あ！！にいに！！」

「へ？」

後ろから美也に声をかけられた。

「にいにこれから帰り？」

「ああ、でもどこか寄り道したい気分なんだよな。」

「うんうんみゃーもわかるよその気持ち。」

「美也も寄り道したい気分なのか？」

「うーん、みゃーはこれからゲーセンで待ち合わせなのだ！！」

「へー、美也がゲーセンなんて珍しいな、で誰となんだ？」

「にしししー、気になる？」

「まあ、気になる。」

「新しい友達！！格闘ゲームが得意なんだって！！」

「へー、ついに美也にボーイフレンドが出来たか。」

「ブッブー！！実は女の子なのだ！！」

「なんだ女の子だったのか、でも珍しいな、女の子が格ゲーなんて」

「ふっふーん、みゃーのお友達と闘ってみる？にいに……。」

「な、ふっ丁度いい、僕は今、ネガティブパワー全開なんだ。女の子だろうがなんだろうが、捻り潰してやるっ！！」

「じゃ、えーっとブレイブールってゲームだから先にやってて、みゃーとお友達は後から行くから。」

「おう！！」

僕はいきり立ってゲーセンに走って行った。

何度かやった事のあるゲームだったので、とりあえず主人公の大剣使いを選んでCPUとの対戦を始めた。  
結構コンボも決まってスカツとする。

「であー!!」

「ウオリヤー!!」

「ヘルズファンゲー!!」

声も一端の声優っぽいのもまた心踊る。

順調に進んで四回戦目、筐体の向こうから美也の声が聞こえた。

「にししし!! 結構迫力あるね!!」

「うん、そこがリンコ的にはいいんだけど。」

「へー、凜子ちゃんやっぱりかっこいいね。」

「なにそれ、リンコ全然かっこよくないっつーの。」

「かっこいいって。」

と雑談に花を咲かせている二人を尻目に  
CPU相手に必死の闘いを僕は続けていた。

「あ、相手負けちゃいそうだからやるよ?」

「はいはい。」

やっと二人の話も終わり、

向こうはキャラ選択を始めた。

「いつもリンコはこいつ使ってるけど...」

と、猫のようなキャラにカーソルを持って行った。

「おー!! みゃーもそのキャラが気になってたんだー。」

「そっか、じゃ今日はこいつ使おう。」

スタートボタンを押すとバトルが始まった。

「さ、今日もボコボコにしますか...」

ぼきぼきと指鳴りが聞こえたと思うと

あつと言つ間に倒されてしまった。

「おー凜子ちゃんつよいー!!」

「やりーい!!」

「にいは完敗だったね。」

「ああ、君強いな。」

「にいつてあー!!」

「あれ？図書館の。」

「あれもう知り合いだったのにと凜子ちゃん。」

「うん…まあそうだけど、リンコもさ、あの時ちよつと嫌な気分だったし…ごめん。」

「ん？いや僕は気にしてないから。」

「にししし、にいにちよつとは嫌な事忘れられた？」

「ああ、美也と君のお陰だよ。」

「君君っていつまで名前聞かないの？」

「え？あ…ああ僕は橋純一、よろしくな。」

「小早川凜子、よろしく。」

「にしししー新しい友達出来たね!!さーてみゃーも便乗便乗!!」

こうして小早川と美也とゲーセンで楽しく過ごした。

He is something in between・5（前書き）

小ネタを挟みます。

タイトルの意味がわからんて方に意識をすると

「悪友と書いて愛しい人と読む」

となります。

直訳だと

「彼のいくつかの事は中間にあるのだ。」

となつて、棚町の悪友か恋人かの境を彷徨つという意味で捉えてくださいませ。

ちなみに

「彼はいくつかの事の間にあります。」

とすると、橘君は何かに挟まれちゃいますし

シユールな感じを醸し出しちゃうので気をつけてくださいませ。

薫と僕がこうして毎日話し合い  
バカやっている事に別に変化なんていらぬ。

秋空の朝の通学路に  
欠伸をしながら歩く学生達も  
なにも変わらないし変わっていない。  
ただ季節が刻々と変わるだけだ。

「おっはよー!!」

「よう薫、珍しいなお前と通学路で会うなんて。」

「でしょー、ちよつとずつあたしも変わってきてんのよ!!」

「そっか、でも今日はヤケに元気じゃないか？」

「そっかな？ま、いつものあたしよりいい思うわよ!!」

「うるさくなければ最高なんだけど。」

「ひっどー!!それあんたがいう言葉？」

「うん。」

「そうなんだー、いう言葉なんだー。」

「そうだよ。」

「ま、関係ないっし!!」

薫は胸の前で手でバツを作ってはにかんだ。  
でもどこか違う。

いつもの薫の笑顔じゃなかった。

「じゃ、あたし、恵子に呼ばれてるから先に行くわね。」  
「うん、じゃあな。」

薫は急いで駆けて行ってしまった。



「あ…薫。」

「へ？」

後ろから薫を追いかけて  
田中さんが走って来た。

「ちよつと田中さん！！」

「え？あ…橘君。薫どうしたの？」

「あ…どうしたもこうしたも田中さんに呼ばれてるって走っていったんだけど。」

「私、薫呼んでないわ…いつもはもつと早く着くんだけど、今日は寝坊しちゃって。でも橘君と薫が見えたから。」

「じゃ…じゃあ薫は…。」

「何かあったのかな薫。」

もしかしたら

薫の変化は僕との決別なのかもしれないと  
頭に少し過ぎった。

僕は教室まで走った。

カンカンと鳴り響く階段を駆け上がる。

「薫!!」

教室のドアを開けると咲野さんや絢辻さんがこっちを振り向いた。

「あ…ごめん。」

「ああ、橘君、棚町さんはまだ来てないよ。」

「あ、ありがとう咲野さん。」

「いえいえどういたしまして。」

「私が来るときは女子トイレの方に走って行っただのがみえたけど。」

絢辻さんはカバンから教科書を出し終えて、そう言った。

「そうなんだ、ありがとう。ちょっと探してみ…」

「げっ!!」

「あ!!薫…」

「う…は、ハイ…はは。」

「…。」

僕は薫の挨拶を無視して席に着いた。

「ちょっと純…。」

「薫、どうして嘘ついたんだ？」

「…あ、あたしの勝手でしょ!!どうしてあんたに干渉されなくちゃならないのよっ!!」

「僕は薫を心配して言ってるのにそんな言い草ないだろ!!」

何か引っかかっていたものが  
プツリと切れた。

「変わりたい変わりたいって、なにがそんなに不満だよ！！僕が嫌なんだろ！！友達にたかる様な僕を見て薫は嫌気がさしたから僕から距離を置きたくて変わりたいんだろ！！」

「橘君…。」

「純… あんた、本気でそう思うの…。」

「当たり前だろ！！薫が嘘ついてまで僕から離れたくて、そうしたんだろ！！それ以外の…。」

パシッと

乾いた音が聞こえて僕の頬が熱くなった。

「知らない！！あんたなんか知らない！！最低よ！！」

「うるさいな！！そんなのわかってるよ！！」

薫は歯を食いしばって泣くのを堪えていたが、

自分の机にバッグを叩きつけるとドアを蹴飛ばして外へ飛び出した。

「おい大将って…おい！！棚町がつ」

「あいつがなんだってんだよ！！」

僕は自分の椅子を蹴ってから教室を飛び出した。

## H e i s s o m e t h i n g i n b e t w e e n 7

「ねえ…どうすればいいのよ。」

独りあたしは屋上でつぶやく。

朝の時も、あいつがあたしにあんな事いうから

本当はあたしの事が嫌いなのかなってそう思っちゃった。

「バカねあたし…独りよがりってヤツなのも気づかないであいつに迷惑かけちゃってたわ…。」

でも本当は違う。

こうしてむしゃくしゃしているのはお母さんのせいだ。

再婚相手と話してる姿、

あんなに楽しそうなお母さん、あたしは見た事なかった。

「あたしとじゃそんなに不満なの？」

手すりにもたれかかり

あたしはこのまま消えちゃおうかなとも思った。

「気まずいわね…今日はサボろうかしら。」

いまさら教室に帰ったところであいつと目を合わせるのも  
なんだか嫌。

「バッグだけ取って帰ろう。」

あたしは階段を駆け下り教室に入った。

「よう棚町!!」

「あ…梅原、あたし気分が悪くて…。」

「大将が棚町のこと一所懸命探してるぞ？」

「もう…あたしに構わないでよ…。」

あたしとじゃバッグを取ると逃げようとした。

「棚町さん待ちなさい!!」

絢辻さんがあたしを呼び止めた。

いつもとは違う、真剣な眼の絢辻さんは

あたしの前に立った。

「…クラス委員だから一言言わせてもらっわ。」

「…なによ。」

「あなたの事を探している人がいるのに逃げるのは卑怯よ。」

「う…うっさいわねもう我慢できないわ。あたし帰る!!」

「棚町さん!!」

咲野さんが席を立てて追いかけようとするが引き止められた。  
あたしはバッグを持って再び飛び出した。

僕が教室に戻ると薫の姿はなく、  
ひっそりと静まり返っていた。

「梅原!!...薫は...。」

「ああ...帰っちまったぜ棚町。」

「チツ!!薫のヤツ!!」

「待てよ!!」

梅原が僕の肩を掴んだ。

「今は待とう、追ってもあいつは逃げるだけだぜ。お前もあいつと付き合っててわかるだろ?」

「くっ......わかった、薫が話すまで僕は待つよ。」

「あいつは滅多な事で折れるヤツじゃないさ。」

「わかってる、わかってるさ...。」

「橘君もよく考えるべきだわ。」

「絢辻さん...。」

「棚町さんの話ぶりからしてあなたは誤解していたんじゃないかしら?」

「僕が?」

「そうよ、棚町さんがあなたを避けるそぶりを見せていたかしら?」

「いや、でも今日の朝、僕に...。」

「棚町さんは最近よくお手洗いで見かけるけど、いつも個室から出ると顔を洗っていたわ。」

「薫が...」

「それがどういう事か少しは想像がつくんじゃないかしら?」

「...。」

「私が言いたいのはそれだけよ。」

「薫...。」

チャイムが鳴り高橋先生が入って来た。

「あれ？棚町さんは？」

「今日はおやすみだと思えます。」

梅原が声を上げる。

「そう、じゃあ橘君、棚町さんにプリント持って行って上げて頂戴。」

「

え…あ、はい…。」

僕は先生から受け取ったプリントをカバンに入れた。

薫は今頃どんな気持ちでいるのか

気がきでなかったのは、たぶん僕に罪悪感があったからだと思う。

放課後になった

「あー！！にいにだー！！」

「美也か、あれ？これからか？」

「うん！！今日も凜子ちゃんと帰るんだよー！！」

「そっか、仲良しでいいな。」

「まあねー、あー！！凜子ちゃん凜子ちゃんー！！かえろー！！」

「うん、あ、橘先輩じゃん。」

「やあ、じゃあ僕は用があるからさ。」

「ちよつと待ってよにいに！！せつかくだし、今日も一緒に帰ろうよー」

「いや、薫のウチにプリント届けなきゃなんだよ。」

「へ？棚町先輩？」

「ああ…あいつ学校サボってさ。」

「ねえ…棚町って薫先輩の事？」

小早川が僕に近寄った。

「ああそつだよ。」

「…薫先輩が」

「凜子ちゃん、棚町先輩と知り合いなの？」

「知り合いつていうか、昔は独りぼっちのリンコの事面倒みてくれてたけど…。」

「そうなのか、確かに中学の時に薫がよく後輩の話をしてたけど小早川のことだったのか。」

「そう、母子家庭で凜子もパパと二人つきりだからお互いに愚痴り合ったことあったし。」

「そうか、小早川も苦労してるんだな。」

「…別にそんな大それたことじゃないし、最近パパも再婚したしそ



んなに苦労じゃない。」

「そっか。まあ着いて来たいなら着いてくればいいよ。」

「じゃあ決定！！にしし！！」

美也が靴を穿いて玄関を飛び出した。

## He is something in between・10（前書き）

宣伝タイムです！！

最近…と言いますが、オリジナルの恋愛小説

コイガタリを書き始めました。

たぶんオリキャラとやはコイガタリからこっちに登場させる予定です。

またキャラ投票も随時行っているので詳細はアマキス・プラス＋ト  
ップから願います！！

美也と小早川は二人で盛り上がっていたが  
僕は乗り気ではなかった。

「にいいにもそう思うでしょ？」

「え、あゝごめん、良く聞いてなかったよ。」

「もう話聞く！！リンコがもう一回説明するからさ！！」

「みゃーはまんま肉まんはご飯に乗せても美味しいと思うのに！！」

「だから炭水化物で炭水化物食べてどうするっつーの！！ポテチな  
らいいけど。」

「凜子ちゃんはまんま肉まんの美味しさを知らないのだ！！だって  
お好み焼きとか焼きそばとかでご飯食べる人もいるじゃん！！」

「だからって肉まんをオカズにはしないっつーの！！」

「むう……。」

「やってみたらいいじゃん……。」

「じゃあみゃーまんま肉まん買ってこよーつと！！」

「お、おい美也……。」

美也はコンビニに入って行ってしまった。

急に二人つきりになってなんだか気まずいなと思っていたら、  
小早川の方はそうでもなかったようだ。

「あんたさ、薫先輩とどういう関係？」

「は？あ、いや……友達、かな。」

「ふーん、てつきり恋人かと思って損した。」

「恋人？僕と薫がか？」

「いいじゃん虐げられる彼氏。リンコそっくりの好きだよ。」

「前は嫌いだって言ったくせにな。」

「弱っちい男と虐げられる男とは違うの。わかれ！！」

「あ…そう、だよな。」

「今のあんたは弱っちい男。頑張って虐げられる男にまでなれ!!」

「口が悪いな小早川は…。」

「今更？」

「ああ、今更な。」

小早川はクスツと笑った。

「薫先輩はそんなあんたの事、結構気にしてんのに、鈍感じゃ意味ないじゃん。」

「薫が僕をか？」

「他に誰がいるん？」

「梅原とか。」

「梅原先輩は範疇じゃないんだってさ。前にリンコ聞いたもん。」

「そっか…。」

「だからもつと元気出せっつーの!!」

小早川はバシツと背中を叩いた。

まるでそれは薫がしたような感じがした。

「え？薫、帰って来てないんですか？」

「ええ、早退したなんて知らなかったし…どうしたのかしら薫…」

「一応、プリントだけ置いておきます。僕、薫探してきますんで。」

「ごめんなさいね。」

小早川と美也は黙ってしまった。

「僕は薫を探すから美也は先に帰ってろ。」

「えー！！今日、パパもママも帰って来ない日じゃん！！」

「飯炊いてまんま肉まん乗つけて食べればいいじゃないか！！」

「リンコンち来ればいいじゃん、独りが嫌ならさ。」

「いいのー！！にししし〜じゃあ遠慮なく！！」

「小早川、美也頼むな。僕行ってくるから。」

「りようかい！！ついでにカバンも持つてくからさ、走りづらいだろっし。」

「ああ、サンキュー。」

僕は学ランとネクタイを脱いでカバンの中に入れると、全力で走った。

「薫といつも一緒に行ってたのはゲーセンだし…」

商店街のアーケードを抜けて、駅前のゲーセンに入った。

相変わらずタバコ臭さが鼻を突く場所だ。

「薫…いないな…」

グルッと一回りしたが薫の姿は無かった。

「バイト先にいるのかな。」

僕はゲーセンを出て薫が良くバイトしているファミレスに向かった。

店のドアを開けると

店員さんがこっちに向かって走って来た。

「いらっしやいませ、お客様は何名様ですか？」

「あ…えっと、十羽野高校の棚町さん、今日はこちらにいらっしやいますか？」

「いえ、今日はシフトは入っていません。」

「そうですか…あっとお持ち帰りでもいいんで何か買って行きます。」

「あ、はい！！お持ち帰りでしたらポテトなどいかがでしょうか？」

結局、トトスに薫はいなかった。

他のバイト先もわからず、

僕は独り丘の上公園に足を伸ばしていた。

すっかり暗くなった公園には

人の気配が全く無かった。

コツコツとローファーが敷石に当たる音が聞こえた。

「薫？」

「残念、私だよ橘君。」

「あ…田中さん。」

「うん、私も薫が早退したからどうしたのかなって思って薫の家に寄ったんだけど。」

「そっか…。」

「薫が私にも言うてくれない悩みなんて全然無かったから、心配で。」

「結構重たい問題なんじゃないかな？」

「そうね…。」

僕も田中さんも

それから無言になってしまった。

しばらくして田中さんはじゃあねと一言言って公園を後にした。

結局、薫は一晩探し回っても見つからなかった。

「何処いったんだ薫っ!!」

僕は寝るのも忘れてあちこち駆けずり回った。

薫のウチに連絡しても依然帰って来ていないらしく

お母さんも気が気ではなかったが、僕にも家に帰って休んでと  
そう言ってくれた。

朝日が昇って来た。

学校も今日は休もうと思った。

「薫が家出したのは僕のせいだ!!」

寝ぼけ眼の顔にそう言い聞かせ

僕はひたすら走った。

昼には梅原に電話を入れた。

「梅原、薫は学校に来てるか？」

「よう大将、それがさっぱりだ。通学路でも見かけた奴はいねえつ  
てさ。」

「そっか。」

「それよか純一君よう。」

「なんだよ？」

「棚町みつけた時はチューして…」

「じゃあな切るぞ。」

「うわああつととと、待てよ!!」

「なんだよ？」

「頑張れよ橘純一!!」

「ああ。」



僕はもう一度ゲーションから洗うことにした。

搜索は夕方まで続いた。

それは疲れきって立ち寄った十羽野市のファミレスだった。

僕はカウンター席に座り、メニューを見ていた。

「こんな季節だけど喉からからだからアイスコーヒー飲もう。」

ボタンを押して店員さんが来るまで待っていた。

「ご注文は…あつ。」

「え？」

目の前には薫がいた。

僕は終始啞然としていたが

薫は僕の顔を見ると肩を震わせていた。

「薫…まず一番先に僕が謝らなくちゃ…。」

「そっ…それは後にして…十五分後に終わるから。ごっ！…ご注文は…。」

「アイスコーヒー。」

「…はい。」

薫が走ってキッチンへ入って行った。

それから薫の姿が見当たらなかったが

運ばれてきたアイスコーヒーは

いつものコーヒーより苦かった。

十五分後

僕はスタッフ入り口で待っていた。

「純…ゴメンね待たせちゃった。」

「いいよ…あの…ゴメンな。」

「純一……」

「薫が苦しそうにしてるのに、僕は何もしてあげられなかった。」

「……。」

「どんなくらい辛いかなんてわからないけど、でも薫が苦しんでる事に変わりなかった。」

「……。」

「僕には薫の苦しさはわからない！！けど、どうにかして薫の力になる事なら出来る！！ずっと薫の笑顔を見たいから、ずっと薫とこうしてたいから、だから！！」

「……てんきゅ……純一。」

「え？」

「んっ……。」

薫の目尻から涙が零れた時

僕の唇に暖かい感触が伝わった。

「んん……。」

「う……ちゅ……。」

「かお……る。」

「ぷはぁ……ふふっ！！契約完了！！」

「けっ、契約ってなんの契約だよバカ薫！！」

「ずーっと私の側にいる契約よ！！」

「なんだよそれ！！」

「さっきあんたから言った癖に！！」

「え？僕……。」

「ずっと薫とこうしてたいってさ。」

「……。」

「純一……あのね、来て欲しい場所があるの。」

「え？」

電車に乗り込み臨海駅に着いた。

強い潮風が改札を駆け抜ける。

「もう少し行った所よ…。」

海に沿う歩道には、季節外れの影響か人の姿はちらほらだった。

ただ、革靴が立てるリズムと波の音が僕達を包んでいた。

「あそこ、港の丘公園よ。」

「…凄いな、綺麗な場所だよ。」

「いつもの公園とは違う雰囲気でしょ。」

「ああ、町じゃなくて海が見えるな…。」

「…純一。」

「ん？」

「あたしね、あんたと喧嘩する前の日にバイト先で知らない男の人と一緒にいるお母さんを見たの。」

「え？…それって…。」

「もうお父さんはいないけど、でもなんだか許せなくて…。」

「そんな事があったのか…。」

「うん、でね、なんで二人で頑張ろうって決めたのにお母さんは逃げたのかなってプツン切れちゃってね。」

「お母さんとも喧嘩したのか？」

「ううん、そうじゃなくて、甘えなくなっちゃってでもお母さんには甘えられないから…あんたに…。」

「そっか。」

「…。」

「小早川って覚えてるよな。」

「え？なんであんたが凜ちゃんの事…！」

「同じ高校の後輩なのに、それはないだろ？」

「え？今凜ちゃん、あたしと同じ高校なの？」

「美也と仲良しだぞ。」

「そうなんだ…。」

薫は海を見つめながらしばらく黙っていた。

「ねえ純一。」

「ん？」

「あたしを見つけてくれたの、あんたで良かった。」

「そうか…僕も薫が無事で良かった。」

「ふふ、か弱い女の子が良かった？」

「それは僕じゃ手に負えないから、薫が強くて良かった。」

「じゃあうるさいくて良かった？」

「ああ、うるさくないと調子出ないよ。」

「てーんきゅっ…！」

「ああ…！」

僕達は帰路についた。

「朝から妹と登校なんてシスコン？」

「な訳無いだろー！」

美也と待ち合わせをしていた小早川に釘を刺された。

「お兄ちゃんはいつもみゃーを置いてくから、たまには一緒に登校するのだー！にししー！」

「だそうだ、ほら、僕は潔白だろ？」

「にいとかがお兄ちゃんとか、そうやって妹にいろいろ言わせてるのを見ると、リンコ納得しないなあ……。」

「ぐっ……。」

「お兄ちゃんが学校ではおに……。」

「うわあああ、みみみ美也ー！」

「怪しい……。」

「ふぐう……僕だって……僕だって……好きな人くらい……。」

「お？誰だ……リンコに言ってみなよっ……！」

正直、僕に好きな人はいない。

しいて言うなら森島先輩だが、それはただの憧れだ。

果たして僕の好きな人ってだれだ？

「ヤッホー純一……あれ？凜ちゃん……！」

「薫先輩じゃん……薫せんぱ……い……！」

「まったく、今でも甘ったれなんだからっ……！」

「嬉しいからいいじゃん……でも先輩、どうして家出なんかしたの？」

「ん？うーん……純一には話したんだけど……。」

薫は小早川に今までの経緯を淡々と話した。

小早川はその間、真剣に話を聞いていたが

険しい表情ばかりを浮かべていた。

「薫先輩、甘いですよ…。」

「え？」

小早川の口から出た言葉は意外なものだった。

「親だつてちゃんとした再婚相手を探して、子供に苦労かけさせた  
く無いって思うの当たり前です…。」

「凜ちゃん…。」

「リンコも悩んだ、いっぱいいっぱい悩んでパパが新しいママと一  
緒にいるのを見たら怖くなった。」

「…。」

「でもリンコは耐えた！！パパが選んだママだからってそう思つて  
！！」

「凜子ちゃん…。」

「リンコは新しい家族が出来て嬉しかったよ…リンコに弟が出来た  
んだもん…。辛い事だけが世界じゃないって教えてくれた。だから  
薫先輩も頑張つてよ！！リンコの大好きな薫先輩はそんな事で逃げ  
ないもん！！」

「てんきゅ…凜ちゃんに言われるなんてあたしもまだまだね。」

「薫先輩…。ごめんなさい…リンコ、先輩に酷い事…。」

「いいの、よくわかったから。凜ちゃん…てんきゅね、本当に。」  
「うん！！」

小早川の泣く姿は

なんだかとても輝いていた。

## He is something in between・16（前書き）

そろそろ次回作のヒロインを決めたいので

リクエストがある方はドシドシ感想欄に書きなぐってくださいまし

！！

前回投票結果も薫以外で反映致しますのでご安心を

今のところ次回ヒロインは七咲になりそうですが、皆様のリクエスト  
お待ちしております！！



相変わらず僕と薫の関係は悪友

秋が過ぎ去り、すっかり冬の冷さに包まれた11月の半ばにとある事件は起きた。

「橘君、ちよつといいかな？」

「え？」

薫との朝の恒例、夫婦漫才の最中、田中さんが声をかけてきた。

「あー！ いっけない、恵子ごめんね。あたし純一に言うの忘れてたわー！！」

「な…なんだよなんだよ？」

「じゃ、じゃあ放課後に校舎裏に来て？」

「あ、うん…。」

なんだか今日の田中さん、雰囲気少し違った感じがした。

半ば強引な誘いに乗って

僕は放課後に校舎裏へ向かった。

「あ、来てくれてありがとう橘君。」

「ああ、で僕に用事って？」

「うん…あのラブレター…なんだけど。」

「え？」

田中さんは少し恥じらいながら

僕に一通のラブレターを手渡した。

梅原や薫のイタズラじゃない

正真正銘のラブレターだ！！

「…これ。」

「うん、中…見て？」

「あ、ああうん…。」

白い封筒を開けると

中からピンクの手紙がチラリと顔をだした。

これは予想だにしない結末なのかと

終始高鳴る胸を抑えながら手紙を開く。

パリパリつと紙が擦れる音がして

綺麗な字が見えた。

「えつと…。」

上から順に読み進める。

並ぶ好きですという文字

女の子の切実な想いの丈を目にし

最後の文字に目を向けると

「へ？神谷正樹？」

「ひっかかたわねー純ー！！」

「薰っ！！お前田中さんと組んでまた俺を引っ掛けたのかっ！？」

「違うわよ。あはは、ねえ恵子？」

「うん…これ、男の子がみたらどう思っかなって思っで。」

「あ、そうならそうと初めに言えば良いのに！！」

「それじゃあ本当の気持ちかわからないでしょ？で、どうだったわけ？」

「ど…どうだったって…。」

「あんたが恵子のラブレター読んだ感想よ！！ね？ドキドキした？」

「うん…まあ、ドキドキした。」

「きゃー！！恵子、よかったわね！！」

「うん！！これで神谷君に渡せる。ありがとっ、薰！！橘君！！」

「はいはいどーいたしまして！！」

こうして僕の一瞬のロマンスは幕を閉じた。

その日も平凡な朝になるはずだった。

「おはよ…」

「あんた達が何したかわかってんのっ!？」

「てめえには関係ねえだろ棚町!!」

「関係あるうとなかろうと、あたしは絶対に許さない!!」

「やめて薰っ!!」

散らかった机とその間で睨み合う薰と神谷

鬼の様な形相の薰に縋り付く田中さんも見える。

周りの人達はヒソヒソと話をしていたが、

絢辻さんが間に入った。

「事情はわかったわ、だけど神谷君、一番悪いのは貴方よ。棚町さんと田中さんに謝るべきだわ。」

「うるせーんだよ偉そうな口効きやがつて!!」

逆上した神谷の拳が絢辻さんに降りかかる寸前で僕はその手を抑えた。

「いくらなんでも女の子に手を出すなんてレベル低いんじゃないかっ!!」

「橘…てめえは女子の味方して好かれないからこんな事するんだろ…。」

その一言で

僕の何かが切れた。

僕の右手が神谷の頬を殴った。

不意を突かれたのか、神谷はよろけて机に激突した。

「やったなてめえ!!」

「やめなさい!!」

ドアが開いて栗生さんが神谷を取り押さえた。

「高橋先生、神谷君を。」

「ええ、立ちなさい神谷君。あと、棚町さんと橘君は一時間目の休み時間に生徒指導室に来なさい。いいわね?」

「...。」

僕は呆然と立ち尽くしながら

コクリと頭を振った。

一時間目の授業はまるで頭に入らなかった。  
僕と薫はチャイムがなると同時に席を立ち  
早歩きで教室を出た。

「待つて二人とも…。」

田中さんが後ろから走ってきても、薫は振り向こうとしなかった。

「薫…私…。」

「あんたは黙ってなさい…。」

「…か、薫…！ゴメン薫、私…！」

「黙ってなさいって言ったでしょ…！あんたが口だしてもこれはあ  
たしらの事なのよ…！関係ないでしょ…！」

「関係なくないわよ棚町さん…。」

「…え？」

呆然と立ち尽くす田中さんの後ろから

絢辻さんが歩いて来た。

「全部一人で抱えようとししないで、橘君もよ…。」

「…あたしは、別に…。」

「そう思っているのは私だけじゃないわよ。」  
すると、

そろそろとクラスメイトが廊下へ出てきた。

「ほらね？」

「大将も棚町も水臭いぜ…！いつも一緒だろ？」

梅原が僕の肩を引き寄せた。

「ちったあ男らしい事ができる様になつたな純一。」  
「梅原…」

「心配すんなって、俺達が麻耶ちゃん説得するからよう!!」

「あ…ありがとうな。」

「いいってことよーんじゃ行こうぜ!!」

梅原が生徒指導室に向かって走り出すと  
僕も釣られて走った。

川田先生に注意されても僕達は走った。

「…っと、ここまで来たはいいが、いざ目の前になると気が引けるな。」

「ああ…。」

「じゃあ開けるわよ。」

絢辻さんがドアノブに手をかけて回した。

「来たわね橘く…え!?どうしたのみんな!!」

「クラス委員として率直にいいますと、今回の件についての橘君と  
棚町さんは潔白だと思います。」

「絢辻さん…あなた。」

「はいはい、俺もつすよ!!」

「私です!!」

「僕も二人とも悪くないと思います!!」

「ちょ…ちよつとみんな…。」

クラスメイト全員が僕と薫の味方になっていた。

結局この話は事なきを得たが

田中さんの心の溝はあまり塞がっていなかった。

軽く眠気覚ましに屋上へ上がった時だった。

「ぐすつ」

風に混じって誰かの泣き声が聞こえた。

フェンスにもたれかかった田中さんは

僕を見てギョツとしたように身を縮めた。

「田中さん？」

「あ…た、橘君…。」

「大丈夫？」

「私に構わないで…！」

「田中さん…！」

田中さんは走り去っていった。

僕は田中さんを追いかけなかった。

彼女に今、何を言うべきかがわからなかった。

「…い子のバカ…！」

「…。」

階段の方で声がした。

「あんたね…！どうしてそんな事しようとしたのっ…！」

「薫に関係ないじゃない…！私はもうこの世界が嫌…！」

パシッ…！

と乾いた音が聞こえた。

「だからって死んでどうなるのよ…！あたしはあんたが死ぬなんて許さないから…！」

僕は寒さも忘れて立ち尽くした。

「おい、何をやってるんだ。イジメか…？」

「誰よ…！」

「何やってるって聞いているんだ、この子が可哀想じゃないかつ！  
！」

「だから誰よ！！なんの真似よ！！」

「俺は2Dの草壁総一だ。で、好い加減にしないか。」

「うるさいわね！！死にたいとか変な口叩くのが悪いんじゃない！  
！」

「それをちゃんと聞いたか！！それからやったのか！！」

「違うわよ！！」

「じゃあ一方的に叩いたならそれは君が悪いぞ！！」

「あー！！もうサイツテー！！バカみたいね。」

カンカンと足音が聞こえた。



薫の雰囲気は明らかに変だった。  
田中さんは見当たらないうえに  
もう授業は終わっている。

突然、ガタツと椅子から立ち上がると

薫は僕の前に立った。

「ねえ、今日の夕方暇？」

「え？…あ、ああ。」

「ん！！ならよかった！！ちょうど買い物に行きたかったのよ。」

「はいはい…。」

「ちよつとー！！反応薄く無い？」

「いやーいつもの事だしね。」

「そ…それもそうね、じゃあまた放課後ね！！」

「ああ。」

薫の目は笑っていなかった。

次の時間は田中さんも席についていたが

薫は一言も口をきかないでいた。

冬間近の11月の末はあまりにも寒かったけど  
教室の中はストーブが効き始めていたので  
逆に小春日和の様な暖かさに居眠りをする生徒が続出した。

「はい…じゃあ今日はここまで。」  
チンピラばりの末永先生の授業は居眠り生徒はいなかったものの

大あくびをかましていた。

「純一、さ!!行くわよ!!」

「あ…ああ。」

薫に手を引かれ

僕は町に繰り出した。

「どう？可愛い？」

「うん…それにしない？」

「でもちよーっと違うわね…。」

「…。」

予想はしていたけど、

やっぱり買い物には時間がかかった。

「聞いてんのっ…！」

「あ…悪い…。」

「だらしないじゃないもう…！」

「なあそろそろ…」

「次あのお店よ…！」

「…薫。」

「な…何よ。」

「嫌なことあったんだろ？」

「ち、違うわよ…！ほら、いこいこ…！」

「もう良い時間だと思うぞ。」

「…。」

「薫…。」

薫は服を戻すと一目散に走り出した。

「待てよ…！待てって…！」

薫が走った道には黒い点が目印のようになっていた。  
革靴の音が河原に響いた。

もう言葉が出ない。

息が切れそうになった時だ。

「あ…。」

薫はつまづいてよろけた。

寸前で薫を庇うと

二人して土手の芝生を転がり落ちる。

「はあ…はあ…はあ…」

上に乗った薫の目からは涙が溢れて止まらない。

僕を見る事に一生懸命なのに

薫は僕を見る事が出来ない。

「純…い…うつ…。」

「薫、辛いなら辛いつて言えよ…。」

「じゅ…いち…あたし恵子と…。」

「泣くなよ薫、な？泣くなつて…。」

「む、無理よっ…！」

そう言つと薫は僕を抱きしめて泣いた。

小さな肩が震えていた。

僕はその肩をしっかりと抱きしめて上げる事だけが、  
今、僕が薫に出来る一番大切な事だった。

ひたすら泣いた薫は  
照れ臭そうにはにかんで  
少し目を擦った。

「弱いとこ見せちゃったわね…。」

「いいさ、それが知れて逆に良かった。」

「弱点見つけて満足かしら？」

「…いや、やっぱり友達なんだなって。」

「なによ？」

「ほら、薫が家出した時の事覚えてるか？」

「そりゃ〜覚えてるわ。」

「その時な、田中さんと丘の上公園で会ったんだ。」

「え？…じゃあ。」

「ああ、平気な顔してたけど、脚はヨロヨロだった。」

「…。」

「丘の上公園に行こう。まだ時間大丈夫だろ？」

「…うん。」

薫がコクリと首を振った。

「よし！！今度は僕が先に行くぞ！！」

渋る薫を置き去りにして僕は走り出した。  
薫も小さく微笑みながら僕を追いかける。

「待ちなさいよ！！コラ！！」

「待つかよ！！」

白い息が坂に続き、

丘の上公園に着いた。

ベンチに人影が見えた。

「橘君…。」

「やっぱり、田中さんならここにいると思った。」

「え？」

薫が息を切らして入り口に入ってくる。

「薫…。」

「…恵子。」

「…。」

「ずっと恵子に謝ろうと思ってた…でも勇気がなかったの…！」

「…薫。」

「恵子、あたしを殴りなさい…！」

「え？」

「殴らないとあたしは恵子を抱きしめられない…。」

「薫…出来ないよ…！」

「いいの恵子…！」

「うん…。」

田中さんはずっと息を吸って

薫の頬に平手打ちをした。

「薫…。」

「いいビンタじゃない…。」

そう言うと

薫は田中さんと抱き合い  
お互いに涙を流した。

「よう大将！！知ってるかこの話！！」

「ふえ？」

不意を突かれて僕は変な声を上げてしまう。

「ぶっ…ふ…ふえ？って」

「うるさいなー！！いきなり話しかけるなよ！！」

「あははは悪かった悪かった！！でよう、その話なんだがな？」

クリスマスが近づいて

すっかり冬の装いを見せ始めた頃

「あんだつてえええ！？」

「声！！声大きいぞ大将…。」

「ああ…すまない…つい取り乱して…。」

「何をどう取り乱してんだかつ！！」

「え？」「げっ！！棚町…。」

「いってみなさーい？さあ…さあ！！」

「い！！言える訳無いだろ！！」

「そーだそーだ！！男同士で恋バナしたなんて言える訳…」

「言える訳？」

「無い…だろ…。」

「うっそー！！！！」

薫はほっぺに手を当てる。

「あ…ああ…あんだ達がここに恋バナ！？」

「文句あるかよっ！！」

「へ…へエ…いやあたしにや関係無いけどね。」

「ならどっか行ってな！！」

「でさでさ、どんな話なのよっ」

「…クリスマスデートだけど。」

「え？」

薫の顔が曇った。

「うんクリスマスデート。」

「そ…そう、相手、いるの？」

薫はこちらを見て少しニヤつく

「俺はいないが…大将は？」

僕はチラリと薫を見た。

願わくば、僕は薫と過ごしたいと思っている。

「誘おうと思う人はいるけど？」

当たり障りのないように言った。

薫はそれを聞くと

少し顔が陰しくなった。

「薫、大丈夫か？」

「だ…大丈夫よっ！！そういう話ね、んじゃ…！」

「お…おい薫…。」

薫は廊下に飛び出てしまった。



「シャキツとしろっ棚町薫!!」

またボケーっとしてしまった。

更衣室の鏡の前でほったをペシツと叩いて気合いをいれる。

デキシーズはウチの生徒をトトスと二分する  
結構人気のファミレス。

あたしはトトスと掛け持ちでここのバイトを始めたのは  
もともと純一をある所に誘う為だった。

「薫ちゃん？大丈夫う？」

「あ…姉ヶ崎先輩…今日はシフトじゃ。」

「ううん、店長に呼ばれちゃって。」

「そう…ですか。」

「うん!!…あ!!…もうっ元気ないぞっ!!」

「えあ…ゴメンなさい。」

「うーん…もちよっと。」

「はっはい!!」

「うん、じゃあ私は先に行くから!!」

そう言っ姉ヶ崎先輩は厨房に走って行った。

「元気ないぞっ…ね。」

あたしも姉ヶ崎先輩を追って厨房に繰り出した。

やっぱり薫の様子はおかしかった。

「くそ…全然面白くないじゃないか…。」

ビーバー三國志を放り投げた。

バレてしまったのだろうか、

「バレたら最悪だな…。」

「にーに？いる？」

「あうん…どうした？美也。」

「にしししーお邪魔しまーっす！！」

「ああ、で？なんだ？」

「にーには今年のクリスマスは予定ないでしょ？」

「え？いや…そのお」

「むむっ？…怪しい…。」

「ぐっ…。」

「んまあそれは置いといて、今年は家族でクリスマス旅行に行くのだ！！」

「…。」

「にーにがまだ受験生になってないウチに行きたいんだって。」

「僕が…。」

「どうしたのににー？嬉しくない？」

「い…いや、でもさ…ちょっと考えさせてくれないか？」

「え？…そっか、にーに！！」

「ん？」

「みやー応援してるから頑張るのだ！！にししし！！」

「おう！！」

美也は少し寂しそうに笑いながら  
僕の部屋を出て行った。

「妹に応援されちゃったよ…はは、」  
「ありがとう…美也。」

美也が廊下で泣く声が聞こえたが  
今、あいつにかけてあげる言葉が見つからなかった。

「美也、昨日はゴメンな?」

「へ?にやに、にいに、いきにやり。」

朝御飯に食らい付く美也は

箸を咥えたままこちらを向いた。

「ほら、家族旅行の...」

「あ!...いいっていいって!...みゃーは何も気にしてないのだ!」

「本当にか?」

「うん!...昨日紗江ちゃんちでみんなでクリスマスパーティーしようってお願いがあつてねえ。」

「紗江ちゃん?」

「うん!...紗江ちゃん!...同じクラスの転校生だよ!」

「へエ...人脈深いんだな美也。」

「にししし...みゃーの周りにはお友達が沢山なのだ!」

「そっか、気をつけて行つて来いよ。」

「うん!...あ!...今日は菜々ちゃんと登校する約束だったからお先!...」

「おう!...さて、僕も朝御飯食べて行こう。」

パンにかじりつき玄関を飛び出した。

「クリスマスまであと三日、薫に話をしなくちゃな...」

通学路に入ると、人が増えて来た。

「よう大将!...元気してるか?」

「おう!...おはよう梅原。」

「ついに三日後はクリスマスだなあええ?どうよ、その子に話した

のかよ？」

「いや…まだなんだけど、」

「あ…橘君だ。」

「おっす！！」

「おはよう田中さん。」

「うん、昨日ね、薫にクリスマスのお誘いをしたんだけど。」

「薫に…。」

なんだか嫌な予感がした。

「薫、クリスマスもバイトなんだって。」

「ひょえー！！柵町も良くやるぜ！！なあ大将！！」

「あ…うん。」

「なんだあ反応薄いなあ。」

「あ…いや、ゴメン。」

「別に誤んなくっても言いけどよ、なんか思う所があるって顔してるぜ？」

「…。」

「いつて来い大将、俺も薄々気づいてたさ。」

「え？」

「お前が柵町をクリスマスデートに誘う気でいたのはさ。」

「え…じゃあ薫は勘違いしてバイトをワザと…。」

「そうだろうな、田中さんも誘う相手を間違っちゃいけないぜ？」

「わ…私？」

「おうよ、俺に構うな、あと三日、精一杯やれよな大将！！」

「うん…。」

予想外の事態だった。

「薫…。」

放課後の帰り際の薫に声をかけた。

「あのさ薫…今度の。」

「あ、ゴメン、これからバイトだから…また明日ね!!」

「え…薫…。」

薫はそそくさと逃げるように走り去った。

僕は呆然と立ち竦み

しばらくその場を動けずにいた。

「どうして…。」

あたしは今日も鏡の向こうで泣いていた。

本当は泣いていないのに

どうしてか鏡の向こう側のあたしは泣いている。

「ねえ、鏡は本当の自分しかうつさないんでしょ？」

涙が伝う頬を

右手でなぞった。

「ほら…濡れてなんか…ない…じゃない。」

手のひらを見ても、

見えない、

「見えないじゃない!! 見えない、見えない…うつつ。」

純一

純一…純一

橘純一

悪友と恋人の境。

「昔言ってたわよね…」

それはあたしがあんたと出会った中学の先生の授業。

「覚えてる？友達と書いて恋人と読むってことわざ。」  
彼は私の中ではどっち付かずって意味。

「He is something in between…あれが今のあんたよ。」

お風呂のシャワーの蛇口を捻った。

「バイトな訳ないじゃない…バカ。」

それから僕達は何も喋らぬままにクリスマス当日を迎えた。

家で寝転ぶ僕のところ

美也が駆け込んで来た。

「にいに！！凜子ちゃんだよ？」

「小早川？」

「うん！！」

「ああ、ちよつと待つてな。」

僕は玄関に向かった。

「よつす！！へへっ、やつぱりアンタは独りだったか。」

「小早川…会って早々に言っていていい事と悪いことがあるって言うの教えてやろうか？」

「うわっ…冗談効かないって…。」

「今日のいにはしょうがないのだ…で、どうしたの？」

「あつとき、薫先輩なんだけど。」

「薫…。」

「うん…本当に先輩、さつき丘の上公園で見つけてさ、ずっと誰か待つてた見たい。」

「…そっか…。」

「…そっか…じゃないっつーの！！絶対アンタの事待つてたんだとリンコ思っただけど。」

「僕？」

「他に誰がいるんだーってリンコ前に言っただじゃん！！もうじれったいなあ！！」

「何がだよ！！」



「絶対純一は丘の上公園に来るからあたしは待って何度言っても聞かなかったし!!」

「…薫。」

「ほらさっさと行くっ!!」

「…そうだな。」

もし小早川の言っている事が本当なら  
今すぐにでも…

「行つて来るぞ美也!!」

「ふえ…い、いつてらっしやい…。」

僕は薫をいつも乗せて居た自転車に跨り  
全速力で丘の上公園に向かった。

「薫!!」

ベンチに座る薫が見えた。

「じゅ…純一」

「あのさ…薫、今暇か？」

「バカね…暇、暇に決まってるじゃない!!」

「ならさ…今日、僕とデートしてくれないか？」

「え…？」

「今日はほら…クリスマスだろ？」

「…うん」

薫は俯きながら僕の自転車まで歩いて来た。

「中学の時覚えてるか？」

「うん…あたしがこの後ろに乗って。」

「そうだな。」

「ほ、ほらせつかくだから…。」

「ああ。」

僕が自転車に乗ると、薫は荷台に座って僕の腰に手を回した。

「そんな乗り方だったっけか？」

「うっさいわね!!寒い!!」

「そっか…。」

キィ

つとペダルを回すと、車輪が音を立てた。

冬の夕暮れに染まる街は  
あまりも鮮やかだった。

僕達は十羽野市と輝日市をグルリと回って  
クリスマスで賑わう街並みを見て行った。

「今日はすごく楽しかったな。」

「そうね……。」

日は沈み

イルミネーションが輝きを増す街を  
僕達は疾走した。

今日

薰と行きたい

最後の場所を目指して。

H e i s s o m e t h i n g i n b e t w e e n . F I N

「ここ...。」

「ああ、輝日東中学だよ。」

「ちょっと、誰もいないじゃない!!」

「当たり前だろ? もう11時も結構な時間だし。」

「はーん、もしかあんだ、こんなくーい学校に連れ込んでエッチな事をする気でしょ?」

「ば...バカ!!...入るぞっ」

「はいはーい。」

「思ってたより暗いな...。」

「そうね...でも星が綺麗...。」

「なあ薫...。」

「ん?」

「薫と過ごした日々、僕はずっとこのままで良かった。」

「うん...。」

「いつも笑顔でいて、それだけで良かった。」

「うん。」

「だけどき、薫が家出したり友達と喧嘩したりいろいろあって、やっぱり薫ともっと一緒に居たくなった。」

「純……。あたし……」

「薫、僕は薫が好きだ。悪友じゃなくて僕と恋人になって欲しい。」

「あたし……嬉しい……ふふ、涙がとまらないじゃないっ……もう！  
」

「薫。」

泣きじゃくる薫に僕はそつと唇を重ねた。

薫の暖かさが

いつまでも僕の体に伝わって来た。

「ふふ、純……てんきゅね……」

H e i s s o m e t h i n g i n b e t w e e n . F I N (後書き)

いやー

棚町薫編も無事に終了です!!

原作未プレイで結構なオリジナル加減を醸し出しましたがいかがでしたでしょうか?

次回は七咲逢編が始まります!!

つとその前に

幕間S H O W、少しお付き合いくださいませ!!

では

グッバイ!!

## 次回予告

「あ、どうも七咲逢です…。」

「あらもしかして今度のヒロインって？」

「ヒロイン？…なんの話ですか？」

「なんのって作者と読者に聞いた方が早いわよ？」

「じゃあ単刀直入に作者さん、ここってなんなんですか？」

え？なんなんですかって…えっと、

七咲さんのね、男の子とお付き合いするまでの過程を  
勝手におれが書かせてもらってるんですけどね。

「あ、そういう話でしたか。」

「いや、そんな軽い話じゃなくてね…。」

「では棚町先輩、お疲れ様でした。」

「へ？」

「次回七咲逢編お楽しみに！！」

## ボニーテールは運動上手？

「えつとその、なんで私達競争しなくちゃいけないのかしら？」  
それは夏のある日、プールのスタート地点に三人の少女の姿があった。

「せっかくだから、この三人に中で1番タイムが早い人を探してみたいの。」

川田先生はにつこりと笑いながらストップウォッチを取り出す。

「でも不公平ですよ、先生。」

「そうです！！私と咲野さんはともかく、どうして塚原先輩なんですか！！」

「いいじゃない、咲野さんも高嶺さんも同着だったし。」

「いや、先生。私も不公平だと…。」

「あら、実は二人共貴方の一年前の自己ベストを若干上回っているのよ。」

「えー！！…本当ですか？」

「ええ、本当よ。」

「これはいい逸材ですね先生。」

「ええ、でも尺が短いからそろそろはじめるわよ！！」

「尺ってなんですか！！」

「位置について！！」

「よいい、スタート！！」

勝手に始まった水泳レースは



序盤から咲野さんと高嶺さんの攻防が繰り広げられた。

等の塚原先輩は余裕のいきおいで自分のペースで泳いでいた。

「早い…。」

プールにきた七咲は食い入る様に見つめた。

ターンのと、ついに塚原先輩が奇襲をかけた。  
一気に詰め寄られ、ついには一着でゴールした。

「おおー!!」

「塚原先輩はやーい!!」

「うっ…悔しいです。」

こうして第一回ポニーテール選手権は幕を閉じた。

## 作者の好きなキャラ&投票結果中間発表

つい先日

「結局のところ、お前は誰が好きなんだ」と言われたので

作者の好きなキャラランキング!!

五位から

五位は里中なるみ、結構いいとんです!!

四位は咲野明日夏、ザッツアスカターン!!ああゆう子は好きです。

三位は高嶺愛花、硬派な子をデレさせるとデレ愛花がストライク。

二位は祇条深月、禁断の恋なの〜と世間知らずかんがもうナイス!!

そして第一位は

中多紗江!!

あんまり人気ないらしいが良くわかりません。

紗江ちゃん!!いや〜紗江ちゃんイイですねえ。

フツカフカですね。

さて

ここでキャラ投票結果中間発表をしまーす!!

では五位から

五位は1票で

上崎理沙、栗生恵、小早川凜子でしたー!!

四位、2票で

絢辻詞！！

三位は3票で

二見英理子！！

二位は4票で

森島はるか、棚町薫でした。

一位！！5票獲得で七咲逢！！  
でした！

おっと

この次回作ヒロインの投票の仕方ですが

一人持ち票を三つまでとして

感想欄に好きなキャラの名前と

そのキャラに何票入れるか名前の横に書いてください。

例1)

中多紗江 3票

のように一人に3票入れてもいいですし、

例2)

祇条深月 2票

咲野明日夏 1票

例3)

水澤摩央 1票

里仲なるみ 1票

上崎理沙 1票

と分割に入れても構いません。

なお、

メインキャラクターは勿論

上崎理沙、塚原響、田中恵子、小早川美千、川田先生、高橋先生等のサブキャラクターの投票も受け付けています！！

あ…いや流石に里仲のおじいちゃんはダメだからね…

なお、男キャラはメインまででお願いします。

## カナツチ少女の共通点？

「水泳の補習：だよね。」

それは夏のある日、プールのスタート地点に三人の少女の姿があった。

「せっかくだから、この三人に中で1番カナツチな人を探してみたいの。」

川田先生はにつこりと笑いながらストップウォッチを取り出す。

「あの…先生、私…一年生ですけど…。」

「うん…私も二年生だけど、姉ヶ崎先輩もだなんて、それはないよ。」

「ほらほら、桜井さんも中多さんも、今日は合同の補習って事で。」

「はい。」

三人はスタート台で準備運動を始めた。

「あれ？川田先生、また始めたんですか？」

七咲は制服のままプールに来た。

「ええ、本当は二見さんも来る予定だったんだけど…」

「二見先輩ですか？」

「そう…でも予定が合わなくてね。」

「なるほど…」

「それにしてもこの三人が並ぶと空気が違いますね。」

「そうね…確かに出てくるトコ出てくるわよね…」

「はい…。」

準備運動を終えた三人は合図を出す。

「はいー」

「位置についてーよいスタート!ー!」

バシャツと言う水しぶきが上がり三人が泳ぎ始め…

「いやー助けてー。」

「だ…誰かぁ。」

「あーいやー!ー!」

と全く前に進めなかった。

「助け…ます?」

「ええ…。」

二人の救助の末

三人はなんとか無事にプールサイドに辿り着いた。

「ハアハア…。」

こうして第一回カナヅチ爆n…少女対決は幕を閉じたのだった。

## 執筆裏話 棚町薫編

今回も懲りずに始めました執筆裏話のお時間です。

ちょうど一週間前くらいに

PSPとエビコレ+版のアマガミを買いました

嫁の紗江ちゃんと次回作ヒロインの七咲をスキBESTでクリアしました。

とまあそう言う話なのですが

なんせアマガミのソフトの方に問題がありまして…  
まさかの

初回限定版!!

…。

祇条さんのクリアポスター目当てです  
完全にそれ目当てです!!

ええ!! 本当は祇条さん目当てですもの!!!!

そして棚町薫編は全く資料が乏しく

棚町ファンに土下座しなくてはならない結果でどうもすみませんで  
した…

今後善処いたします。

えっとキャラクター投票なのですが  
相変わらずの投票率に頭を抱えています。

お気に入り登録もしなくていいです

ユーザーさんでなくても書き込めるようにしてありますから

どうかよろしくお願いします!!



そうだ！！ヘソにキスしよう！！ 休1イベ（前書き）

ちょっと男のロマンを詰め込みすぎているので  
苦手な方は七咲編へお飛びくださいませ！！

そうだ！！ヘソにキスしよう！！ 休1イベ

「おうおう大将…。」

「どうした？梅原…。」

「あいやな…お前、結局棚町のヘソにキスしてないだろ？」

「えー！そういえば…！」

「まあ棚町ファンつつつたらヘソキスシーンが欲しいトコだしな、せつかくだからいろんな女子のヘソにキスしたらどうだ？」

「ええっ…！」

「さーて妄想開始だぜ…！」

姉ヶ崎寧々の場合

「寧々さん…。」

「本当にするの？ヘソキス…。」

「はい…。」

「もう、悪い子なんだあ…お姉さん貴方がそんな悪い子になって悲しいなあ。」

「あ…えつと…。」

「ふふ、照れちゃって…もう…！」

「じゃ…じゃあ。」

「うん…いいよお…。」

「…ちゅ…。」

「あつ…。」

「ね、寧々さん…。」

「あつ…だつてえ…んついい…。」

「…んつちゅ…。」

「はあんつ…もう、ダメつてえ…。」

「まだまだです。」

「くう…あうはっはっ…はういい。」

「おい!!梅原!!」

「おーっとおっと、これじゃあZ指定になっちまうなあっははは!!」

「はあ…でも姉ヶ崎先輩、いいなあ。」

「待て待て!!この妄想も一人で終わると思っちゃいけないだろうなあ?」

「へ?じゃあ。」

里仲なるみの場合

「え!!先輩…私のおへそにチューするんですか?」

「いい…かな?」

「…せ、先輩なら、いい…ですつ。」

「じゃ…じゃあ。」

「あつ…先輩、恥ずかしいです…。」

「ご…ごめん、それじゃあ。」

「んっ…ふふ。」

「ちゅ…。」

「やつく…くすぐったいです先ぱ…ふふ。」

「…んっちゅ…。」

「あははくすぐった…ひゃんっ!!あつ…。」

「…梅原、絶対なるみちゃんってへそにキスされるの弱いって…。」

「だな…。まあ今回はここまでにするか!!次回も妄想広げるぜ!!大将?」

「ああ!!」

## 空色プールサイド1（前書き）

七咲 逢《ななさき あい》

クラス：1年B組

部活：水泳部

血液型：O型

年齢：15歳

誕生日：2月21日

星座：魚座

好きな事：海・部活・夜（静かだから）・弟

苦手な事：うるさい場所や人・病院・数学

家族：父・母・弟

通学手段：徒歩

美也や紗江のクラスメイト。

普段はポーカーフェイスで口数も少なく、クールな態度を取る。

実際は温和で、人情深く面倒見が良い。

共働きの両親を手伝って夕食を作ったり、年の離れた弟の面倒を見たりと家庭的な一面も見せている。

料理上手。

運動神経抜群で、水泳部では大型ルーキーとして期待されている。

だが決してそれに驕ることはなく、人知れず放課後に練習したり河原で走り込んだりと、かなりの努力家。

その反面、頭の回転は早いものの勉強は不得意で、歩くのはあまり速くない。

## 空色ブルーサイド1

それは僕が初めて女の子をクリスマスデートに誘ったあの夜の事。

独りトボトボと家に向かう最中、

曲がり角から人が飛び出して来た。

「うわっ!!」

「きゃあ!!」

ドンッと体当たりをかまされて

フラフラだった僕の方が転んでしまった。

「あ…大丈夫ですか？」

「ああ、君こそ、怪我はなかった？」

「はい!! ではすみません!!」

その女の子は僕にペコリと頭を下げると

一目散に退散した。

これはそれから二年後のお話。

「よう大将!!…元気ないなあ？」

「ああ、おはよう梅原。」

「おうよ、はあ…あと一ヶ月でクリスマスだってゆづのによっ…」

「そうだな…」

「だからよう!! 今年は可愛い子ちゃんとクリスマスデートだぜ！」

「！」

「…。」

「橘…お前いつまでもウジウジしてちゃダメだぜ？」

「そんな事…言われても…。」

「わかってる、充分わかってるぜ大将！！お前が苦しいのはわかるがな、ここは男の意地にかけて女の子にアタックだ！！いつまでもそうしてちゃダメだぞ！！」

「う…うん。」

## 空色プールサイド2（前書き）

こんにちは、作者です!!

皆様からの沢山のご感想、ご意見をいただき誠に嬉しい次第でございます（深々

つでもって

皆様にお知らせがございます!!

ただいま、作者 *f a f u n a r v* は、アマキス・プラス+の更新情報を *T w i t t e r* に上げていまして

活動報告等もそちらに記載したいと考えております。

よろしければ、*f a f u n a r v* にて御検索いただき  
フォロー頂ければ幸いです。

長々と申し訳ございませんが

これでお知らせを終わりにさせて…

「えいやっ!!」

うわ…って美也ちゃん？

どうしたんですか？

「につしししー、作者さんキャラ投票の宣伝、忘れてない？」

ああ、そうですねそうですね

じゃあ、せつかくですし

美也ちゃんにお願いします。

「え？みゃー？」

はい

「じゃあ、えつと…ただいまアマキス・プラス+では次回作ヒロインの投票を行っているのだっ!! 詳細は作者さんの活動報告ページに載せてあるみたいだから見てね!! ねえ作者さん!!」

なんですか？

「みゃーも投票していいかな？」

はい、どうぞどうぞ。

「にしししー、誰にしようかなあ。」

ふふ、では七咲編に戻ります  
皆様、どうぞよろしくお願いします！！



## 空色プールサイド2

梅原もああ言ってたけど

僕ははつきり言って自信はない

「また同じ結果になるんじゃない？」

あの冬の寒さがぶり返すように

この学校の渡り廊下も…

渡り廊下？

「どうして僕は渡り廊下にいるんだ？」

しかも体育館に向かう渡り廊下じゃないか！！

「さっむー…早く…早くもどらないと！！」

わけも分らず玄関に向けて走り出す。

「この扉をくぐれば校舎だし、少しはあったかい筈だ！！」

扉にUターンを仕掛けた

その瞬間だった。

「キャッ！！」

「うわっ！！」

ドン

と柔らかい感触が胸に伝わると

その後すぐに離れて、黒髪の少女が廊下に叩きつけられた。

「ご…ごめん、頭打ってないかい？」

「あ…はい、大丈夫です。そちらは大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫だよ。」

「では私は急いでいますので失礼します。」

「ああ、僕も急いで帰らないとな…。」



### 空色プールサイド3

昨日の渡り廊下が祟ったのか  
朝からどうもお腹の調子が悪い。

「あんた今日何回目よ？」

「あ…薫。」

「そんなお腹痛いなら保健室行けばいいじゃない…。」

「それもそうだな、じゃあ、僕行つて来るよ。」

「いつてらっしゃーい。」

ヨタヨタと歩きながら

壁伝いに保健室を目指す。

階段を降り切つてドアを開けた。

「失礼しまー…すう…。」

予想通り先生はいない

僕は適当に薬を漁つて

腹痛に効くものを見つけていた。

「失礼します。」

「え？」

「…。」

左のひざに包帯を巻いた昨日の女の子が入ってきた。

「あ…君は昨日の。」

「…絆創膏ください。」

「へ？」

「絆創膏です、大きめの奴です。」

「ああ、了解了解。」

僕は絆創膏を渡した。

「備品をもらったら名簿に名前と用途を書いてね。」

「わかりました。」

「ねえ…。」

「はい？」

「そのキズは昨日の…。」

「…はい。」

「じゃ…やっぱり怪我させちゃったね…ごめん。」

「いえ、たいしたことないですから。」

「…ああ、なら良かったよ。」

僕はやつとのこととで薬を見つけると  
コップに水を入れて飲んだ。

「…イタッ。」

「大丈夫…ブツ…!」

振り向いて見えた光景は

彼女が一生懸命絆創膏を貼り替えている

その脚の隙間から見えた

黒いアレだった。

「どこ見てるんですか？」

「い…いやゝはは…。」

「…人に怪我をさせて、治療中の最中にそいつごとにするんですか？」

「そ、そんな訳ないだろう…!」

「じゃあ、どこ見てたんですか？」

「…ぐつ。」

「…。」

「き…君。」

「私ですか？」

「辛そうだからさあ…あはは。」

「…。」

「うつ…。」

さすがに不味い空気になった。

早くここから退散しないと。

「私の心配をしてくれたんですか？」

「あ…うん。」

「そうですか、私は七咲、1Bの七咲逢です。」

「え？一年生なの？」

「はい。」

「僕は二年A組の橘純一だ。」

「二年生だったんですか？」

「え…いやまあ。」

「てっきり一年生かと思いました。」

「うぐぐ…。」

「じゃあ私はこれで。」

そついうと七咲は保健室を出て行った。

## 空色プールサイド4

今朝は何か違った

そう!!

「こ…これは…。」

そう

そうこれだ!!

ラブレターとやらだ…

「ええ…えつとなになに?校舎裏で待ち合わせ…。」

それを読んだ僕の体は

一直線到校舎裏へ動いた。

「うおおおお!!」

クリスマスの傷心が

こんな形で晴れようとは思ってもみなかった。

「はあ…はあ…あつ!!」

「へ?」

そこには一人佇む七咲の姿があった。

「君…だったのかい?」

「え…は…はあ。」

「出逢ってまだ二日しか経ってないって言うのに…。」

「そう…ですね。」

「愛の告白だなんて…。」

「…何をいつてらっしゃるんですか?」

「何をつて…ラブレターさラブレター…。」

「あ…。」

「どうした…言い辛いかい？」

「いえ、それ、私は出してませんけど。」

「へ？」

「はい。」

「い…いやだつてほら、校舎裏に…。」

「はははは…！傑作だぜ大将…！」

「うわっ…梅原…！まさかこの手紙…！」

「ぶははは…！そうだよそうそう、その手紙は前の仕返しだあ…！」  
「…えっと、状況が良く飲めないんですが？」

七咲が間に入った。

「あ…ああ、悪かったな七咲、俺は梅原だ。」

「え…もしかして美也ちゃんが言ってたお兄さんの友達…。」

「美也と知り合いなのか？」

「へ…じゃ…じゃあ美也ちゃんのお兄さんって橘先輩だったんですか？」

「ああ。」

「お前の妹はいいなあ、人脈深くてよう。」

「いや…まあ。」

「それより、七咲にどうしてこうなったか説明しなくちゃな。」

「あ、はい。」

梅原がしゃべり終えると

七咲は少しあきれ顔になった。

「おバカな二人ですね…。」

「うぐっ…。」

「ふふいい意味ですよ。」

七咲はそう言って去って行った。

## 空色プールサイド5

その日の夕方だった。

「お兄ちゃん!!」

「え?...美也?」

「うん!!これから帰りでしょう?」

「ああ、どうした?」

「これから友達と一緒に帰るんだけど、お兄ちゃんも一緒に帰ろう?」

「おう、邪魔じゃないなら一緒に行くか。」

「うん!!あ!!逢ちゃん!!こっちこっち!!」

「...橘先輩。」

「ふえ?もう二人知り合いなの?」

「うん、この怪我は橘先輩とぶつかってできちゃって。」

「ええ!!お兄ちゃん逢ちゃんになんて事したの?!」

「待て美也、確かに僕が悪かった...けどな」

「いえ、私も注意していれば怪我なんてしませんでしたし...」

「お兄ちゃんは逢ちゃんの部活を知らないからかーく言えるんだよっ!!」

「え?...どういうこと?」

「逢ちゃんは水泳部のエースなのだ!!」

「ちょ...ちよつと美也ちゃん...」

「そつだったのか七咲...」

僕が言い寄ると七咲は苦い顔をした。

「いえ、そんな大それた者じゃありませんから...」

「...そつか。」

しばらく三人でしーんとなっていたが



美也がほら帰ろうと一言掛けたので  
二人して驚きながら顔を見た。

「ごめんな…七咲。」

「気にしてませんってば。」

「いや、なんだか申し訳が立たなくてね…。」

「じゃあ、後でその申し訳の分をキツチリと立てて貰いますから今はいいですよ。」

「はい…。」

いつもの商店街のアーケードをくぐるとなにやらゲームセンターの方で声が聞こえた。

「てめえ何したかわかってんのかよおい!!」

「…。」

「ガキだからって容赦しねえぞ、おいリュウタやっちまおうぜ。」

小さい男の子を取り囲んで

二人のバツの悪い不良が捲し立てている。

「い…郁夫!!」

「え?」

七咲が声を上げた。

「郁夫!!なにやってるの!!」

「お…おい七咲!!」

慌てて七咲は不良の中の男の子を庇う。

不良はニヤつきながら七咲に迫る。

「おいおい、そのガキんちよのねえちゃんか?」

「弟君にこっちは大迷惑なんだよね〜。」

「すみません…。ほら郁夫も謝って…。」

「ちよつと待てよ、謝っただけで済ませる訳ないだろ?」

「え…。」

「きちんと体で払って貰うとするか…。」

「ちよつとソコ、さつきからうるさいんだけど。」

震える七咲の前に女の子が割って入る。

「おいおいまたねえちゃんかよ。」

「で、お前は何しに来た訳？」

「同じ学校の子が絡まれてたら、普通たすけるし…。」

「絡まれて？はあ、バカ言ってるんじゃない？」

不良の一人が女の子に近寄ると

お腹を押さえて倒れてしまった。

「てめえ殴りやがったな！！」

もう一人の不良が女の子目掛けて拳を振り上げた時

僕は七咲と女の子の前に立って降りかかる拳を受け止めた。

「女の子に二対一は卑怯だぞ…。」

「…橘先輩。」

「七咲と君は逃げろ、後は俺がなんとかするっ！！」

「あ、くそっ逃がすかつ！！」

「そうはいかないぞ！！」

「離せつてめえ！！」

「ぐあ！！」

鳩尾に膝が叩き込まれる。

痛すぎて正直動けないが

必死の抵抗で、四人が見えなくなるまで耐えた。

「これでいいなっ…。」

「くそっあいつらがいねえんじゃない話になんねえ。」

二人の不良はよろよろと歩き出した。

## 空色ブルーサイド6

ヨタヨタ歩きでみんなが逃げた方向を歩いていると  
美也が路地裏から手招きをしていた。

「にいに…大丈夫?」

「ああ、それよりも怪我不いか?」

「う…うん。」

七咲も女の子も無事な様だ。

「あんた見た目よりも男らしいじゃん?」

「いや、あれはとっさに体が動いてね。」

「ふーん、あんたもリンコと同じ学校?」

「ああ、君はリンコって言うのか。」

「べつ別にいいじゃん!!リンコはリンコだから。」

「そっか、僕は橘純一、そっちが妹の美也とその友達の七咲…で、  
弟?」

「はい、弟の郁夫です。」

「へエ、アタシ凜子、小早川凜子。」

「さつきはありがとうな小早川。」

「へへ…あいつら、リンコが格ゲーでコテンパンにしたら怒っちゃ  
つたみたいで…。」

「え?…さつきあいつら、郁夫君の事を攻めてたんだけど…」

「…へ?…そっか、郁夫君がやってたのか…。」

小早川は一人納得した様に頷いた。

「郁夫が何かしたんですか?」

「ん…レバーを弄ったんじゃない?」

「レバー?…って何、にいに。」

「レバーは格ゲーの筐体に付いてるあの棒の事だよ。つまり、郁夫君は人がやってる格ゲーのレバーを弄くったから、怒られていたんだな……。」

「い……郁夫、どうしてそんなイタズラしたの……！」  
「……。」

「まあいいじゃないか七咲、後で僕が郁夫君に格ゲー教えてあげるからさ。本当は郁夫君、格ゲーやりたかったんだろ？」

「……うん。」

「そっかそっか、な……今回はそういうことで許してあげな、七咲。」

「はい……。ごめんね郁夫、お姉ちゃんが遊んであげられなくて……。」

「……ううん、お兄ちゃんが遊んでくれるから嬉しい……！」

「いいなあ……みゃーも弟欲しい……凜子ちゃんもそう思うでしょ？」

「実はリンコ、弟いるんだ。」

「え？いいなあ……。」

「再婚相手のお母さんの子供だから義理の弟だけだね。」

「そうなんだ……。」

「もう……！暗い顔しなくていいじゃん……！」

「うん……じゃあさ、今度みゃーに見せてよ……！」

「いいよえつと、そっちの七咲って子も来たら？」

「私？」

「うん、郁夫君も快と仲良く慣れるだろうし。」

「そうですね、じゃあお邪魔させて貰います。」

小早川は満足そうに笑って背伸びした。

「さーて、そろそろリンコも帰らなくちゃね、じゃあ……！」

「ああ気をつけて帰れよ小早川。」

「わかってるっつーの……！」

「じゃあ僕達も帰るか。」

「うん……！」

## 空色プールサイド7（前書き）

作者スランプ中でございます…

ちよっと考える時間って事で停滞するかも知れませんが  
お願いします…

## 空色ブルーサイド7

「あ…おはよう七咲!!」

「え?あ…おはようございます先輩。」

「郁夫君何かいってたか?怖がつてなかった?」

「ええ、大丈夫です。それよりも、お兄ちゃんにゲーム教えてもらうんだーって、母に自慢していました。」

「そっか、喜んで貰えて何よりだよ。」

「はい…あの、昨日はあの状況で上手く言えなかったのですが、ありがとうございました。」

「え…ああいいさ、気にしないで。」

「あの、蹴られたところ…。」

「ああ…大丈夫大丈夫!!」

「そっ…ですか。では失礼します。」

七咲はぺこりと頭を下げると

玄関に走って行った。

「僕もそろそろいかないとな…。」

玄関を抜けて教室に向かった。

「おはよう!!橘君!!」

「え?あ、おはよう咲野さん。」

「うん、昨日ゲームセンターのところにいなかった?」

「え…うん。」

「部活帰りで途中で見かけたんだけど、大丈夫だった?」

「ああ…大丈夫さ。」

「よかった。逢ちゃんに手を出してたみたいで。」

「え？咲野さんって七咲と知り合いですか？」

「うん！！私はサッカー部と水泳部の掛け持ちだから。」

「へえ。」

「塚原先輩が、咲野さんもコッチに入って欲しいわね…って言うてたけど。」

「けど？」

「私にはサッカーがあるから。」

「そうか。咲野さん、サッカー一筋だもんね。」

「うん！！」

咲野さんはにつこり笑った。

「逢ちゃん独りだと危ないけど、ちゃんと貴方が見守ってあげてね  
！！」

「はい。」

## 空色プールサイド 8

「どうしてだろう…。」

昨日、お腹痛くて保健室に行っても最終的に蹴られたから…

「どうも調子悪いな…。」

僕は保健室のドアを開けた。

「あ…。」

見ない顔だった。

三年生だろうか？

「君、どうしたの？」

「あ…いえ、お腹痛くて、薬を。」

「そっか、えーっとさっき使ったからそこかな…。」

「あ、ありがとうございます。」

その先輩は僕をジッと見つめていた。

「えっと…僕の顔に何か付いてますかね？」

「え…ああ、ゴメンね。備品のファイルに名前を書いて頂戴。」

「はい。」

僕が名前を書き終わると

その先輩はパツと立ち上がった。

「君、橘純一君？」

「あ…はい。」

「私は水泳部の塚原響よ。」

「あ、あの…。」

七咲の怪我について

何か言われるのじゃないかと思った。



「君が七咲とぶつかった男の子か…。」

「いえ、あの…すみません!!」

「どうしたの？」

「七咲の部活の邪魔になつてすみませんでした!!」

「いや、対した怪我じゃないから部活に支障はないよ。」

「あ…そう…でしたか。」

「うん、ほら摩央!!もう時間よ…。」

「ふあ…。」

「せっかく話そうと思ったけど、私たちは実験だから早く支度しなくちやなの。」

「あ…そうでしたか…。」

「ええ、悪いけどまた話させてね？」

「はい。」

そういうと塚原先輩は水澤先輩を叩き起こして去っていった。

## 空色プールサイド9

昼御飯を買いに食堂に出掛けると廊下の向こうから小早川が歩いて来た。

「あ…橘じゃん。」

「おい小早川、先輩に言っていていい事と悪い事があるんじゃないか？」  
「だって橘じゃん。」

「小早川…。」

今度は僕の後ろから七咲がやって来た。

「楽しそうですね先輩。」

「…楽しそうに見えるか？」

「はい！！私は楽しいです。ね？凜子ちゃん。」

「うん！！リンコも楽しい！！」

「おまえらああああ！！」

僕と二人がじゃれあっている所に案の定美也がやって来てしまった。

「お兄ちゃん！！何やってんの！！」

「ふえ？あの人が美也ちゃんのお兄さん？」

「そつだよ紗江ちゃん！！エロエロ攻撃してるお兄ちゃん…近寄ると食べられちゃうよー！！」

「ええ！？…私…。」

「でもなんだかじゃれあってるだけじゃ無いの？」

「なるみちゃん甘いよー！！あれはエロエロ攻撃なんだからっ！！」

「美也！！」

「ひえ！！にいにこっち来るなー！！」

「煩い！！散々バカにしゃがってー！！」

「みゃーは本当の事！！」

「何が本当の事だ！！」

「こら！！橘君！！」

そして高橋先生に見つかり  
みんな揃ってシゴかれた。

「でも…先輩、私たちは悪くないって一生懸命だったね…。」

「そうだね、でも私も美也ちゃんと一緒にだったし。」

「うん、橘先輩、この三人は関係無いんですって言って結局高橋先生の怒りを買っちゃったけどね…。」

中多さんとなるみちゃんと相原さんは  
まだ小言の絶えない生徒指導室を後にした。

## 空色プールサイド10

昼の一件からか

高橋先生のご機嫌も斜めだ。

「はい、次、橘君。」

「…太閤検地です。」

「はい、理由を言つて。」

「…年貢を上手く確保するためです。」

「はい、次のウに入るのは？橘君。」

「人掃令です。」

「エ！！」

「朝鮮出兵です。」

「次！！」

「バテレン追放令です。」

「次！！」

…

「大将…今日はヤケに麻耶ちゃんにシゴかれたなあ。」

「うつ…梅原あ…。」

「なにさへこたれちまつて…、大変だったな？」

「ああ…。」

「よー！！純ー！！お客さんよーん。」

薫がグニャグニャになっている僕に近づいてそう言った。

「僕に？」

「先輩！！」

「な…七咲？」

教室の視線が一気に僕に向けられる。

「い…移動しようか？」

「はい…。」

僕と七咲は人目を避けて屋上へ向かった。

「えっと…どうした？」

「…あ、さっきの事を謝ろうと思ひまして…。」

「ああ…いいっていいって。」

「で…でしたら何か…。」

「じゃあさ、七咲の事を話して貰いたいんだけど…。」

「え？私ですか？」

「ああ…ほら出身の小学校とかつて。」

「あ、そういう事でしたか。私は輝日南小出身で郁夫も同じです。」

「え！！七咲は輝日南だったの？」

「はい…。」

「実は僕も輝日南だったんだ！！」

「そうなんですか、もしかしたらその時出会っていたかも知れませんか？」

「ああ…でさ、あそこイカの滑り台があつたよね？」

「へ？先輩、タコの間違いじゃないんですか？」

「いや絶対イカだよ！！」

「タコです！！」

「イカだよ！！」

「ぜーったいタコです！！」

「じゃ…じゃあ、日曜の夜、確認に行こう！！」

「ええ！！絶対にタコの滑り台だってこと、証明しますからね！！」

「望む所だ！！」

かくして

七咲と日曜の夜に出掛けることになった。

## 空色プールサイド11

日曜日になった。

「にいに？出掛けるの？」

「ああ…ごめんな美也、ちょっと行って来るから。」

「うん、いつてらっしやーい。」

寝ぼけ眼の美也をやりすごすと

僕は小学校に向かった。

「おいお前！！」

「…っやめてください！！」

曲がり角の向こうから聞き覚えのある声が聞こえた。

「ゲーセンのときはよくもやってくれたな？」

「…。」

「あやまねえ気がよ！！」

「っ…。」

「ちっ…じゃあサクツと体でケリつけるか？」

「いやです…。」

「いやですじゃねえよ！！」

僕は走ってその声の場所へ向かった。

「おい！！」

「ああん？」

「先輩…。」

気が散った不良の隙を見て

七咲は足を纏れさせながらもこちらに走って来た。

「んだよてめえ！！また蹴られてえか！！」

「そんな事でいちいち女の子の子に手を挙げてても仕方ないと思わないか

「!!」

「うるせえ!!やるなら来やがれ!!じゃねえと俺がボコボコにしてやる!!」

「…七咲、学校に行くのは来週にしよう、僕が頭を触ったら全力で逃げる…」

「でも先輩…」

「いいから。いくぞ!!」

僕は七咲の頭を軽く叩くと不良目掛けて突進した。

七咲も暗い夜道へ逃げて行った。

「くそっ…てめえだけでもぶっ飛ばしてやる!!」

不良の拳が左の頬に叩き込まれた。

「ぐあ…」

「けっ、口程でもないな、うんっ!!」

倒れた僕のお腹に容赦なく蹴りが入る。

「うりゃ!!くそが!!うんっ!!」

「いつっ…」

数分経つただろうか

後ろから自転車が走って来た。

「その君!!警察だ!!大人しくしなさい!!」

「やべえ…ポリスだ!!」

不良は蹴るのを止めると

一目散に逃げに行った。

「先輩!!…大丈夫、ですか?」

「七咲…へへ、かつこ悪いな…ぐふう…」

「どうして…どうして先輩はいつも…」

「だって、許せない…だろ?」

「先輩…」

「七咲を怪我…させたの…僕だし。」



「先輩は…馬鹿です…。」

「ふふ…酷い、な…七咲は…。」

「馬鹿…馬鹿あ…せんぱい…怖かったです…!」

「大丈夫だから…泣くなつて。」

「先輩…。」

七咲は震える体を僕の腕の中に寄りかけた。

## 空色プールサイド12

暗い夜道を二人で歩く。

街灯に照らされるたび七咲の顔は暗くなる。

「先輩…。」

「いって、言いたい事はわかってるから。」

「…ごめんなさ」

「悪かったな…七咲。」

「どうして…。」

「ん？」

「どうして先輩は私なんか…。」

「…ほら、咲野さんに言われてさ。七咲守ってあげろって。」

「…それとこれとは、」

「関係あるさ、一人で抱えてどうする？」

「…。」

「七咲。」

「はい？」

「タコの滑り台、もっかい見に行こうな？」

「…はいっ!!」

七咲の顔がやっと晴れてくれた。

「先輩。」

「ん？」

「今日の先輩、かつこ良かったです…。」

「え？あ…そう…はは…。」

「ふふ、嘘です。」

「お…おいしい…なんだよそれー!!」

「御世辞にもなりませんね。」

「ひでーな。」

「当然です!!」

「うつ。。。」

「ふふ、今度は私が誘っていいですか？」

「え？あ…うん。」

「じゃあ臨海駅近くの公園に行きたいです。」

「おう？まかせとけて？」

「じゃあ、今日はありがとうございました!!」

「ああ、」

七咲は小走りで去って行く途中でこちらに何か行ったようだがその言葉は僕の耳に届かなかった。

### 空色プールサイド13

「おはようございます先輩!!」

「おはよ...。」

と七咲の声に反応したのに

とうの七咲は塚原先輩の方に走って行ってしまった。

「橘先輩!!」

「え?」

「もうお兄ちゃん、逢ちゃんの声にはーっかり反応してる...。」

「へへ、不意をつかれちゃいましたね先輩。」

「美也...友達がいる前でやめてくれよ...。」

「逢ちゃんが最近みゃーにお兄ちゃんの事聞くようになったからなーんか怪しいと思ったのだ!!」

「だからってー!!」

「へへ、兄弟っていいですね。」

「なるちゃんはひとりっ子だもんね。」

「うん、菜々ちゃんと美也ちゃんにはお兄さんがいて、逢ちゃんと凜子ちゃんには弟がいて、あたしと紗江ちゃんがひとりっ子だもんね。」

「でもお兄ちゃんがいて損するよ...。」

「おい美也っ...。」

「えー!!絶対お兄ちゃんがいたら楽しいもん!!」

「お兄ちゃんなんてコソコソエッ...ふぐぐ!!」

「あはは...美也、お前に話があるんだよーほら里中さんは遅れちゃうからお先にどうぞ。」

「ふぐぐ!!ふぐぐーっ!!ふっ!!ふっ!!」

「えへへ...じゃ、じゃあね美也ちゃん。」

里中さんは小走りで校門に入って行った。

「さーて美也…。」

「じゃ、じゃあみやーもお先なのだ!!」

「まてこらああああ!!」

## 空色ブルーサイド14

その日のお昼だった。

「大将、お客さんだぜ？」

「え？」

僕が見た先に、七咲がいた。

「先輩、ちよつといいですか？」

「ああ、いいよ。」

「今日、郁夫とゲームセンターに行く予定なので、先輩も来ていただけですか？」

「あれ？七咲は部活なんじゃ？」

「ええ、終わってから行きますので、待っていていただいていいですか？」

「ああ、じゃあ何処かで時間潰そうかな。」

「はい、ありがとうございます。では失礼します。」

「ああ、じゃあまた放課後にな。」

「はい！！！」

七咲はぺこりと頭を下げると  
ひとの中に消えて行った。

「さてと、じゃあどこで過ごそうかな……。」

僕が後ろを振り向くと二人の先輩がニヤニヤしながら近づいて来た。

「ちよつとあんた、放課後暇ならちよいとあたしらの手伝い、してくれないか？」

「求人募集……。」

「は？え……えつとどちら様で？」

「ふふーん、何を隠そう茶道部の夕月瑠璃子とー!!」

「飛羽愛歌…。」

「へえ…。」

「ああーるっこ先輩にまなか先輩い!!」

「ようりほっち!!」

お間抜けな声を上げて走って来たのは  
幼馴染の梨穂子だった。

「あれー？純ーどうしたの？」

「梨穂子こそどうしたんだ？」

「まあまあ、りほっちは茶道部期待の部員だからねえ。」

「茶道ルーキー。」

「まあ顔見知りってことでさ、頼むよ。」

「…事と次第に寄りますよ？」

「あっはは、大丈夫さ!! やましい事なんてしないからさっ!!」

「…じゃあ暇なんで手伝いますよ。」

「よーしじゃあ放課後にテラスでな!!」

「現地集合。」

「はい。」

またいやな予感しかしないと思えるのは  
先輩のニヤついた顔が原因だと思った。

## 空色プールサイド15

結局流されるままにテラスに向かった。

「お、結構早い到着だな。」

「あれ？梨穂子は来てないんですか？」

「遅刻確定。」

「はあ…これじゃ次期部長候補も困るよね…。」

「あはは…。」

「んじゃまあ始めるか。」

そう言つて夕月先輩は木の骨組みのテーブルを指差した。

「コタツさ、これを部屋に運んでくれ。」

「あ、それならお安いごようですよ…よいしょと。」

「マッチョムキムキ…。」

「そんなんじゃないですよ…結構軽いですから。」

「へー…軽いか…。」

「ええ、」

「で本題なんだが…。」

夕月先輩は唐突に質問を始めた。

「あの七咲って女の子、塚原響のお気に入りみたいでな。」

「ええ、」

「こんなこと言っちゃなんだが、最近不調らしいのを耳にしてさ。」

「…はあ」

「塚原が凄い心配をしてな、あたしらにも何かわかるかって聞くらいだからな。」

「…そんなに不調なんですか？」

「スランプとは違う…。」



「うーん…。」

「もちろん、あんただけに問題があるわけじゃないだろうが、一応見かけた分際だしな。」

「え？見かけたって？」

「あたしらの家は輝日南小学校の近くでな。」

「えー！じ…じゃあ。」

「ああ、あの一件はちゃんとしてるよ。」

「うう…。」

「不純異性交遊…。」

「ちー！違いますー！！」

「まあどうしたもこうしたも、過ぎた事だし、変えられるのはあんた達だけってもんだ。」

「…。」

「あの後輩、大事にしろよ。」

「…はい。」

部室までの道のりはとてつもなく短かった。

## 空色プールサイド16

そそくさと茶道部室から逃げた僕は  
七咲が待つ為校舎裏へ向かった。

「俺はお前が好きだ!!」

「…いきなりなんなんですか？」

角の向こう側から男女の声が聞こえた。

「なあ、君は好きな人も恋人もいないんじゃないのか？」

「…それがどうしてあなたと関係あるんです？」

「君は最近、あの二年生と一緒にいるけど、結局はあいつ、君を怪我させたんだろ？」

「…それは私の不注意、あなたには関係ないですから。」

「それにあいつといると危ない!!聞いたんだぞ!!俺は、あいつといると不良に目を付けられて…」

「それも私の不注意です。いい加減にしてください。」

「待てよ…俺は純粹に君の事が…」

「橘先輩の悪口を言う為に私に近づくなら帰ってください!!」

女の子の声は、確かに僕の名前を呼んだ。

「俺はあいつが危ないから君を…」

「…私は貴方とは付き合えません。ごめんなさい。」

「チクシヨウ!!」

男子はそのまま花壇を抜けて走り去って行った。

「先輩、立ち聞きなんていい趣味ではないと思いますよ。」  
「え？」

「ふふ、バレバレです。ちょうど部活も終わったので、一緒に帰りましょう?」

「あ…ああ。」

「もう先輩、何変な顔してるんですか?」

七咲の顔が近づく。

仄かなカルキの匂いが僕の鼻をくすぐる。

「七咲は…」

「はい?」

「いや、なんでもない…。」

「ふふ、よくわからない人ですね先輩。」

「うつ…言いづらい内容だったからしょうがないじゃないか。」

「じゃあそう言う事にしておきます!!」

「とことん酷いなあ七咲。」

「今気づいたんですか?」

「…結構前から。」

「そうですか、でも先輩だけですよ。」

「え?」

七咲は振り向いて笑った。

「早く行かないと郁夫が可哀想ですよ。」

「…あ、ああ。」

## 空色プールサイド17

七咲は終始明るい顔で話しかけてくれたが  
僕は夕月先輩の言葉だけが頭の中に蔓延っていた。

「先輩!!」

「あ? ああ... なんだっけ?」

「... 先輩、今日はいつ以上に変ですよ?」

「そう... かな?」

「... ツツコマないんですか?」

「... ごめん。」

「先輩...」

「七咲、ごめんな... 僕。」

「私の部活の事ですよね?」

「う... ああ。」

「大丈夫です!! あれはただのスランプですから。」

「... でも。」

「それとも私が告白されてるところを盗み聞きして、してやったり  
って思ってるんですか?」

「ち... 違う!!」

「ふふ、必死ですね先輩。」

「な... 七咲い。」

七咲がもう一度笑顔で話し始めた。

「... ですね先輩。」

「ああ。」

「美也ちゃんがるみちゃんのうどんを食べて〜。」

「ああ。」

「まんま肉まん乗せたら美味しいかも〜にしししー。って。」  
「あはは。」

それから時間はあっという間に過ぎて、  
七咲の家の前に着いていた。

## 空色ブルーサイド18

「郁夫！！郁夫おゝ！！」

七咲は玄関を開けて郁夫君を呼んだ。

「…。」

「いくよ郁夫。」

コクンとうなづいて

郁夫君は玄関を飛び出した。

「それじゃあ行きましょう？先輩。」

「ああ。」

僕が歩き出そうとすると

郁夫君は七咲と僕の手を取った。

「あ…。」

「ブランコ…。」

「ふふ、僕も良くやったよ。」

「ええ、私も良くやりました。」

「…。」

「行くよ七咲。せーの！！」

「それっ！！」

手を上げると

郁夫君は宙に舞った。

楽しそうに足を地面から離して

ワザと体重をかける。

「もうそろそろかな。」

ゲームセンターの前に着くと。

郁夫君は格ゲーの筐体に向かって走って行った。

「じゃあやろうか？」

「…。」

ブンツツと音が出るほど大きくうなづいて五十円をいれた。

「まずキャラクターを選んで？」

郁夫君はカーソルを動かして

一通りキャラクターを見た。

「どれがいい？」

「…。」

「…マヂ？」

「…。」

投げキャラを選んだ郁夫君は早速バトルを始めた。

「せ…先輩。」

「いやあ…強いんだよこのキャラ…。」

「そ…そうですね。」

さすがにこんなデカ物を選んだら引かれるなと心に思った。

「ちなみに先輩はどんなキャラを使うんですか？」

「ん？ああ…この主人公だよ。」

「ガラナ？ですか？」

「そう…ガラナ・ザ・ブラックエイジ。」

「へえ…。強いんですか？」

「う…たぶん。」

「…先輩。」

「え？」

「この台、相手が居ませんよ？」

「そ…そうだね。」

画面の右上の勝利数が10を超えていた。

「先輩。」

「わかったよ…本気を見せてやるからな七咲!!」

「はい!!」

郁夫君の横に座って五十円を入れた。



## 空色プールサイド19

「ふふ、先輩ボロ負けですね…。」

「うつ…七咲、面目ない…。」

「次はちゃんと勝ったところを見せてくださいね。」

「ああ。」

真冬の夜は早く

すでに日は沈んで

疲れきって寝てしまった郁夫君をおぶって  
いつもの道をゆっくりと帰った。

「先輩…。」

「ん？」

「先輩って不思議です。」

「…どうして？」

何かポーツと上を見上げていた七咲は

ハッと気づいたかのように

我に返ってブンブン手を振った。

「あ…ち、違うんです先輩。」

「へ？」

「な…なんでも無いですよ…！」

「はあ…。」

「えーっと先輩弱っちいのによく郁夫に教えるなんて言いましたね  
…。」

「酷いなー、あれはプロ…！プロの犯行だよ…！」

「へー…じゃあそう言う事にしておきます。」

「七咲い…。」

僕がへたれると七咲はニツコリと笑った。

「先輩…！」

「ん？」

「今日もありがとうございます…！」

「あ？…ああ。」

## 空色プールサイド20

12月も後半に入って来たそんなある日  
僕を塚原先輩が訪ねて来た。

「君かな？橘君は…。」

「あ…はい。」

塚原先輩は終始じっと僕を見つめると  
ふうと溜息をついた。

「最近、七咲と良く一緒に居るって聞くんだけど、本当なのかな？」

「え…あはい。」

「そう…じゃあ君に相談があるんだけど、聞いてくれるかな？」

「は…はい。」

屋上へ向かって歩き出す塚原先輩を僕は追った。  
重い鉄の扉を開けると厳しい寒さが肌を突く。

「橘君、単刀直入に言わせてもらっけど。」

「はい。」

「七咲にかかわらないであげて頂戴。」

「…。」

「…橘君。」

僕は夕月先輩の言葉を思い出した。

「やっぱりそうなんですネ？」

「ん？」

「やっぱり七咲の泳ぎが変なんですネ？」

「…ええ。」

「七咲…。」

「キツイ言い方かもしれないけど、君には…」

「塚原先輩!!」

扉が開いて七咲と咲野さんの姿が現れた。

七咲は僕と塚原先輩の間に駆け込むと、  
息を切らしながら塚原先輩の前で震えていた。

「…どうして。」

「七咲、一番良くわかつているのは貴方でしょう?」

「だからって!! 塚原先輩…」

咲野さんは僕の制服の袖を掴んで  
ちよつと目配せをした。

ゆつくりと二人から離れる。

「…逢ちゃん、本当は地区予選に出場するスタメンに入っていたんだけど…」

「え…七咲が?」

「うん、だけど半月前から結構タイムが落ちちゃって…」

七咲の必死の身振り手振りが見える。

「七咲も辛かったのかな?」

「え?」

「僕といて、可能性を失って…」

「私はそう思わないよ?」

「え?」

「だから私はあなたが行った屋上に逢ちゃんを連れて来たんだよ?」

## 空色プールサイド21（前書き）

こんにちは

久々に登場！！作者でございます！！

今回の七咲編もそろそろ終盤です。

そこで恒例のキャラ人気投票の宣伝です！！

この小説では次のお話のメインヒロインを投票していただいて決めています！！

今のところ次回は初登場！！キミクスより我らがクールビューリィ

ー二見英理子が登場予定！！

森島先輩とは一票の差です！！

さーてだれが次回のメインヒロインの座に座るのか！！

乞うご期待…

## 空色プールサイド21

「塚原先輩は何もわかってません!!」

七咲の怒号が寒空に響いた。

「私が悪くても先輩は…橘先輩は悪くありません!!」

「悪いとか悪くないの問題じゃないの!!」

「塚原先輩はまるで橘先輩が私の邪魔を…」

「貴方は地区予選が掛かっているのよっ!!二年生まで出し抜いて、落ちた人に申し訳ないという気持ちにはならないのっ!？」

「…それは。」

「どういう状況なのかちゃんと理解しなさい。」

「そんなの私の実力が上だったから落ちたんじゃないですかっ!!  
どうして私ばかり…」

パシンツと

強く軽い音がすると、

七咲は左の頬を押さえて座り込んだ。

「…。」

塚原先輩はスタスタと扉を開くと

校舎の中に消えて行った。

取り残された七咲は

顔をうずめながら泣いていた。

冬の空にただ一人の女の子の泣き声だけが虚しくこだました。

「七さ…」

「橘君!!」

「…さ、咲野さんどうして？」

「…今行っても逢ちゃんには何も出来ないでしょ？」

「だからって!!」

七咲は僕の声が聞こえたのか  
一目散に扉を開けて逃げてしまった。

「七咲…。」

「私だって辛いよ…橘君。」

## 空色プールサイド22

その日の午後は、全く勉強に手が付かなかった。  
放課後になっても気分は滅入るばかりだ。

家に帰って自分の部屋の押し入れを開けた。  
そのまま布団の山に埋れた。

「にいに…逢ちゃんに何かしたの？」

ノックもせずに、美也が部屋に入ってきた。

「違う…。」

「…違くないもん、にいに、押し入れ入ってるし…。」

「…。」

「ねえにいに…みゃー、逢ちゃんもにいにも寂しそうにしてたらやだよ。」

美也の声が震えていた。

「逢ちゃん、苦しいって…にいに！！逢ちゃん苦しいんだよ！！…  
うつ…うつ。」

「…。」

「にいにい…逢ちゃんはにいにの事が好きなんだよ！！みゃーも気づいてた！！みゃーも…気づいてたよ…。好きな人がにいになのもわかったよ…みゃーは二人とも大好きだから、いつも笑顔で居ないと嫌だよ！！みゃー悲しいよ…。」

「美也…。」

「にいに、逢ちゃんは他の事を捨ててまでにいが好きなんだよ。どうしてかわかんないけど、みゃーは凄いなと思ったよ…。ねえにいに、みゃー、二人の笑顔が見たいよ。」



美也がゆっくり押し入れの戸を開けた。  
くしゃくしゃになった小さな美也の体が  
胸にのしかかってくる。

「元気だしてよ…にいに。」

## 空色プールサイド23

学校に着いて早々、咲野さんが駆け寄って来た。

「逢ちゃん、風邪引いちゃったみたい…。」

「え？七咲…。」

「うん、昨日あのあと部活を休んだみたいで、帰りの公園で塚原先輩が通るのを待っていたみたいなの…。」

「じゃ…じゃあ地区予選は？」

「うーん、今週の日曜日だから…どうかな？」

「日曜日って…まだ水曜日だけ。」

「風邪が酷くなければ良いけど…。」

咲野さんは首を捻って困った顔をしていた。

「あ…！」

「うわっ…！」

「あ、ゴメンゴメン…。」

「もう咲野さん…。」

「え、えっとさ、橘君はクリスマスは逢ちゃんと何処に行くの？」

「へ？どうして？」

「あ、えっとさ、創設祭で水泳部っていつもおでんを作ってるから逢ちゃんも駆り出されるみたいだし。」

「ええっ…！」

「凶星だったかあ…。」

「えうっ…。」

「まだ日は有るから、今日お見舞いにいつてなにか話せるなら話したほうがいいよ。」

「うん…ありがとう咲野さん…！」

## 空色プールサイド24

放課後、僕は七咲の家に向かった。

一昨日行つたので、あまり迷わずに着けた。

「すみませーん…七咲さんいらっしやいますかー？」

「はい…。」

ドアをノックして声をかけると

中から女の人が見れた。

「あ…あの、どちら様でしょうか？」

「あ…な、七咲さんの友達の兄の橘純一といいます。」

「あら…！貴方が橘君なのー！！」

「はい…今日は七咲さんのお見舞いにとと思って。」

「ちょうど逢が起きた所なのよ、ささ、上がって頂戴。」

「じゃ…じゃあ失礼します。」

フロアリングの床は綺麗で

二階に上がり、七咲の部屋に向かった。

「七咲、入って大丈夫か？」

「え？…あえつとい、いいですよー！！」

七咲は慌てた様にガサガサと部屋を片付けたのか

ドアを開けるとベッドに腰掛ける七咲の顔が赤く火照っていた。

「あんまり無理しちゃダメだぞ。」

お見舞いのゼリーをナイトテーブルに置くと

七咲がこちらを向いて小さく微笑んだ。

「先輩が来てくれるっていう夢を見たんですよ。」

「へ…へえ…七咲、FBIの超能力捜査官に向いてるんじゃないか？」

「先輩、それすごく酷いです。」

「はは、冗談だよ。」

僕はスプーンを袋からだした。

「七咲はどれ食べる？」

「じゃあ…みかん。」

「うん、はい。」

ピリピリと上蓋をむくと

ほのかなみかんの匂いがした。

「先輩…。」

「ん？」

「今日、実は美也ちゃんからメール貰って。」

「え？…美也から？」

「はい…クリスマスは創設祭終わったらウチでパーティーしようって。」

「…そう…なんだ。」

まさかクリスマスデートを誘う前に美也に先手を取られるとは予想だにできなかった。

「先輩、私、創設祭の前に少し時間があるんですけど…」

「え？…そうなの？」

「はい…仕込みは前日にして、当日は二時に集合なので。」

「あ…そうなんだ…」

七咲の顔が赤くなった。

「ですから…その…先輩とデート…したいんです。」

ツルツと手からゼリーが落ちそうなのをギリギリでキャッチして七

咲を見た。

「い…いいのか？七咲。」

「ええ、お願いします…！先輩…！」

「…よし、」

「へ？」

「じゃあ七咲が次の日曜日の水泳地区予選に出てくれるなら行く  
…！」

「…え…私。」

「大丈夫、七咲なら出来る。塚原先輩も本当に七咲が頑張ったから  
惜しいと思ってたんだ。ほら、元気だしてさ。」

「はい…。」

そうつぶやいた七咲の頭を軽く撫でてあげた。

## 空色プールサイド25

次の日から七咲は学校に来た。

なんでも直ぐに風邪が治る体質だそうで

元気に小早川と弟囃に興じているのだそうだ。

「リンコさー、美也ちゃんに誘われてパーティーしようってさ。」

「へえ…小早川もウチに来るのか？」

「まあそう言うこと。先輩は梅原先輩んちでしょ？」

「え？…あそつか、僕は邪魔になっちゃうな…。」

「そそ、お兄ちゃんは空気読むのが筋じゃん。」

「う…ひどいなみんな。」

「今更？」

「…小早川、冗談もいい加減にしてくれよ？」

「うわっ怒っちゃったよ…。」

「…梅原の所に行つて来よう。」

「じゃ、リンコは教室もどろーっと…！」

小早川は廊下を駆け抜けて行つてしまった。

「はあ…出来れば七咲と一緒に良かったんだけどな…。」

「何が一緒に良いんですか？」

「うわっとな七咲…！」

「さっきの聞いちゃいましたよ？」

「え…あ、そうなんだ。」

「はい、前のお返しですよ…！」

「はは、そう言えばそう言うことも有ったね？」

「はい、あの時は結構焦っていたんですが…。」

「そんなに推しの強い奴だったのか？」

「ええ、変な視線を感じて居たのですが、多分あの人ですね…。」

「へえ…七咲はモテるんだな？」

「そうでもないですよ？」

「ちよつと有るのか…。」

「う…。」

「初めて言いくるめられたな。」

「先輩って酷いですね。」

「冗談だよ冗談。」

「じゃ…そう言うことにしておきます。」

## 空色プールサイド26

七咲と別れて教室に戻った。

「なあ梅原？」

「ん？どうしたあ大将う！！」

「うん、実はさ、クリスマス、お前んちで…」

「あああつと…それは無理な相談だぜ大将。」

「へ？」

「俺だつてただ手をこまねいてたつてわけじゃないぜ？」

「それって…。」

「ま、今年は諦める。」

「うつ…うつん。」

さあコレで詰んだ。

もう僕には選択の余地が無くなった。

「はあ…下で妹さん達の声を聞きながら押し入れに籠るのか…はあ。」

―― 一方その頃 ――

「にししー！！順調順調！！」

「まんまと引つかかってさ…リンコ、つくづく愚直だと思うよ…。」

「まあまあ当日のお楽しみってことで。」

「だね。」



## 空色プールサイド27

「七咲遅いな…。」

土曜日の夕方の事だ。

明日に大会を控え、居残り練習をしたあと

七咲は僕と帰りたいと言ってきた。

幾分時間を潰して、僕は体育館裏に来た。

「いつもの居残りならこの時間までに来てる筈なのに…。」

「あ…！橘君だ…！」

「へ？」

壁に寄りかかる僕に咲野さんが駆け寄って来る。

「ねえねえ、逢ちゃん待ち？」

「ああ、そうだよ。咲野さんは水泳部の方だったの？」

「うん…！逢ちゃん、明日の試合に向けて猛練習してたよ…！」

「ああ、今もやってるのかな？」

「うん…！どうだろう、でも私がプールから出た時にはもういなかったけど、ロッカーに荷物が有ったからまだ居るよ。」

「そっか…！どうしたのかわからないけど。じゃあまだ待つて見るよ。」

「

「うん…！それじゃあまたね…！」

咲野さんは手を振りながら校庭の方へ駆けて行った。

「そっだよな…！明日は大会だもんな。」

僕は階段まで行って座り込んだ。

「…。」

「先輩!!」

「へ？」

僕が階段の上を見ると七咲が居た。

「…遅くなってすみません。」

「ん？ああ、大丈夫だから。」

七咲は目を擦りながら階段を降りて来た。

「七咲、ちゃんと目を開けてないと…」

「へ？つあ!!」

「危ない!!」

七咲は鉄階段を踏み外し、倒れそうになった。

僕は必死になって七咲を受け止めたが

バランスを崩して僕は背中から地面に叩きつけられた。

「いててて…。」

「…先輩…大丈夫ですか？」

「七咲こそ、居残りじゃないならどうしたんだ？」

「わ…私…。」

「…辛いなら無理に言わなくていいから。」

「はい…。」

七咲は僕の胸に抱きついて来た。

「私…頑張ったんです。」

「。」

「でも…とどかないって。」

「…そっか。」

## 空色プールサイド28

「なあ七咲…。」

「…。」

浮かない顔の七咲が僕の方を向いた。

「七咲はさ、頑張ったよ。」

「そんなんじゃないです…。」

「七咲…結果が全てじゃないんだ。」

「…違う…違います。」

「…七咲。」

「私、自分で独り舞い上がってました。」

すっかり暮れた河川敷の街灯に照らされ

七咲の顔がチラチラと見える。

「先輩と出逢う前から、もう代表になっていて、自分の甘さがみんなの足を引っ張り、自分の首を締めて、先輩に迷惑までかけて。私は本当に情けないと思います。」

「そうじゃ…。」

「先輩！！っ」

街灯に映ったのは涙を必死に堪える

いつもと違う七咲の姿だった。

「でも私！！先輩と一緒に居たい！！代表から落とされても私は先輩と居られれば苦じゃ無いと思ってました！！」

「七咲…。」

「なのはどうして…どうしてこんなに苦しいんですか？先輩…。」  
「それは…。」

七咲の髪の毛の匂いがした。  
僕の胸に七咲は身を任せた。

「それはさ、七咲が優しいからだよ。」  
「…。」

「七咲は僕の事もみんなの事も大事にしたいって思ってた。」

「はい…。」

「そうやって自分を犠牲に出来て七咲はとってもいい子だよ。」

「はい…。」

「だからさ、もっと僕に甘えていいんだよ。七咲の辛さは僕がわか  
ってるから。」

「はい…！」

「一緒にデートいこうな七咲。」

「はい…！」

「辛さも忘れられるくらい楽しい一日にしような？」

「はい…！先輩…！」

七咲はそれから声を上げて泣いた。

今までの重圧と辛さを吹き飛ばす様に

七咲はいつまでも泣き続けた。

「七咲、頑張ったな。」

「はい。」

## 空色プールサイド29

「いいの？響ちゃん？」

「いいのよ…彼女は色んなモノを背負っ過ぎてるから…」

「うーん…」

「それより、寧々は今日、バイトなんですよ？」

「そうだけど…まだ時間有るからもう少しデパート廻っていい？」  
「そうね。」

――

日曜日

結局七咲は代表に漏れて

クリスマスパーティーの準備とやらで美也と二人で出かけた。

「さーてと、今日は何をしようかな。」

とりあえず、二日後に控えたデートの下見にでも行こうかとネットを開いた。

「へえ…水族館が一年前にオープンしてたのか。」

となりにはタワーが有る見たいだが

高所恐怖症が仇となりそうなので

七咲が行きたいなら行く事にしようと思う。

「にいにー！！ただいまー！！」

「おじゃまします。」

「おじゃましますー！！」

「あがるよー！！」

「失礼しますっ…。」

「け…結構大人数だな。」

リビングでみんなのはしゃぐ声が聞こえた。

その後、美也が僕の部屋に入ってきた。

「いにー！！お茶ー！！」

「おい…美也が淹れるよ…。」

「えー！！どうせお宝本の鑑賞でもしてたくせに！！」

「…美也、わかったからそれ以上喋るなよ。」

「はい！！にしし！！」

渋々僕は下に降りてお茶を淹れた。

「何人？」

「みゃーと菜々ちゃんと逢ちゃんと紗江ちゃんとリン」ちゃんとなるみちやんで六人。」

「…ずいぶん呼んだな。」

「うん！！多い方がいいのだ！！」

「へー…。」

こうしてまた一日が過ぎた。

## 空色プールサイド30

次の日

学校は創設祭の準備にてんてこ舞いで  
授業は一切休みだった。

七咲はというと

おでんの仕込みに時間を割いていた。

「七咲、どうして僕が手伝わなきゃなんないんだよ…。」

「塚原先輩の御指名ですから。」

「うつ…それはそうとたまごの殻むき、なんで冷水なんだ…。」

「伝統ですから。」

「今日だけはその言葉を恨むよ…。」

「それよりも…。」

「ん？」

「明日の事、本当にいいんですか？」

七咲の表情が少し曇った。

「大丈夫だよ。別にあんまり気にしてないから。」

「…気にしてください。」

バシャッ！！

冷水を顔にひっつけた。

「うわ！！さつむ！！酷いな七咲…。」

「お仕置きですっ…。」

「ご…ごめん。」

「…私は、先輩と夜にお出かけ出来なくてさみしいんですから…。」

「ん？なにか言ったか？」

「気のせいです…。」



「そつか。」

七咲は大根を切り終えて

家庭科室に持って行ってしまった。

「はぁ…。」

「橘君。」

「へ？」

後ろから誰かが僕を呼んだので

振り返ってみると、咲野さんが居た。

「咲野さん…どうしたの？」

「ちよつとね人手が足りないから、塚原先輩が手伝ってくれって。」

「そうなんだ。で、咲野さんは何を？」

「うーん、卵のから剥きだつて言つてて。」

「あ、今僕がやってるところだから。」

「あー!!じゃあ手伝うよ!!。」

咲野さんは腕まくりをして、

勢い良く水の中のボウルに手をつ突っ込んだ。

「ひゃあー!!」

「ぷ…ーっ!!」

「つ…冷たいいあ!!今笑ったでしょ!!」

「あははは!!」

「ひどーい!!冷たいって言ってくれたらいいのに!!」

今度はゆっくりと手を入れて

からを剥き始めた。

「でも結構わかるんじゃないの？」

「う…そりゃ外の水道だから…か。」

「うん。」

「でも言ってくれたっていいんじゃないのかな!!」  
「ごめんごめん。」

そうして二人で卵を剥き終わる頃には  
七咲が戻って来て

大量の卵を三人で家庭科室まで運んだ。

「なるちゃん、お汁どう？」

「うん、大丈夫だよ!!」

「へー、さすがうどん娘。」

「えへへ、ダシは自身あるから。」

こうして、前日の準備は終わり  
七咲と下校した。

## 空色プールサイド31

「せんばーい!!」

クリスマス当日

まだ早いとはわかっていても

待ち合わせ場所に来ると

もうそこには七咲が居た。

「先輩、遅いですね。」

「なんだよ、三十分も早く来たのに。」

「女の子を寒空の下三十分も待たせて言うセリフですか?」

「え?七咲、一時間も前に来てたの?」

「…は、はい。」

七咲が真っ赤になってそっぽを向いた。

「どうした?」

「い…いえ、今日は珍しくスカートをはいてみたんですが。」

「あ…そう言えば。」

七咲は最近よく見かける長いスカートをはいていた。

「いいと思うよ。」

「…それだけですか?」

「に…似合ってるんじゃない?」

「っ…ぐ、そ、それだけですか!?」

「えっと…七咲、か、可愛いよ。」

七咲はもう真っ赤で僕の手を握り締めた。

「い…いきましよう先輩っ!!」

「お、おいおい七咲引っ張るなって!!」

七咲とのデートはそうして始まった。

海岸線を歩きながら、  
水族館を目指す。

「先輩、本当は私、昨日なかなか眠れなくて困ってて…」

「じゃあ、今日はすっごい困るな。」

「え？どういことですか？」

「ん、美也って結構パーティーを何時間もやるタイプだから、明け方まで付き合わされちゃうぞ。」

「あ…明け方まで、ですか？」

「うん。僕も悲しくなるくらい大騒ぎしてさ。父さんと母さんはいつも会社のパーティーで呼ばれちゃってね。」

「じゃあ、明け方に帰るといっておいた方がいいですかね？」

「そうだね、心配するだろうし。」

七咲と話をしていると

もう水族館まで着いていた。

「うわーっ高いですねこのタワー。」

「う…うん。」

「先輩！！このタワーからいきましよう？」

「そ…そうだね。」

やっぱりこう言う展開になるのかと思って

渋谷タワーに登る事にした。

「うわ！！十羽野市も見えますよ！！」

「うんっよし！！」

僕はいきおいよく足を踏み出すと  
結構アツサリと乗れた。

「ほら先輩！！」

「ん？」

「空色プールサイドですよ。」

七咲は町を取り囲む空を指差した。

「まるで浮いたり沈んだり。プールの水のようなこの町で、私は一生懸命泳いでいる時、先輩とであって、先輩に恋して、先輩に助けて貰って。泳ぎ疲れて、いまプールサイドでデートして。…ちょっとクサイですかね？」

「いや…七咲らしくていいと思う。」

「ふふ、私この言葉、すっごく好きなんですよ。」  
「へえ。」

七咲は握っていた手を緩めた。

「先輩…。戻りましょうか？」

「いいのか？」

「大丈夫です。ねえ先輩。」

「ん？」

「…ん。」

七咲の手は僕の頬を抑えていた。  
暖かく優しい感触が唇に伝わる。

「んん…。」

「…。」

七咲は泣いていた。

離れたくないと言わんばかりに腕を肩に回してまだキスを続ける。

「ぶあ…あ…あは、先輩とキス。しちやいましたね。」

「七咲…。」

「七咲好きだ…。」

「へ？」

「七咲好きだって言ってください。」

「…言われなくても言うよ。七咲…大好きだ。」

七咲の華奢な体の全て力が  
僕の胸に伝わって来た。

「橘先輩！！…私も先輩が大好き…。」

七咲とのデートはあっという間にすぎて行った。

## 空色プールサイド32

「先輩、いつしよに帰りましょう?」

創設祭も無事終わり

僕と七咲は校門で待ち合わせた。

息を切らしながら走って来る七咲に駆け寄る。

「美也と一緒にじゃ無くてよかったのか?」

「はい。美也ちゃん是用意をしておくから先に帰ると言っ居たので。」

「へー、美也にしては気が利くな。」

「ふふ、大勢ですから。」

「そっか。」

僕は、少し躊躇いながら

七咲の右手を握った。

「あ…。」

七咲は驚いたのか

一瞬手が遠ざかって、そしてまた強く握り返した。

「帰りましょう…。先輩」

「ああ。」

――

「にししー!!」

「いいの?美也ちゃん…逢ちゃん置いて来ちゃって。」

「ノープロブレムだよ紗江ちゃん!!にいと逢ちゃんの甘い夜には、これくらいの覚悟じゃ無くちゃだめなのだ!!」

「甘い…夜って。そ、そんな、恥ずかしい。」

「紗江ちゃん…どうして顔が真っ赤なの？」  
「へ！？あ…ああ、その、あうあう。」  
「それよりさ、みんなそろそろ来るよ！！」  
「そ、そうだね。」  
「うん！！メリークリスマス紗江ちゃん！！」  
「メリークリスマス、美也ちゃん」

――

「着いた着いた。ケーキ買ってたら結構時間かかったね。」  
「そうですね。じゃあお邪魔します。」  
「はい、どうぞ。みゃあー！！ただいまー！！」  
シーン

「え？」  
「い…居ないんですね？」  
「そんなわけ無いよ。」  
リビングの戸を開けるとこたつの上に一枚の紙が置いて有った。  
『みゃーからにいにへ  
にしししー！！ドッキリ大成功 みゃーはパーティーに出かけるの  
で逢ちゃんと甘い夜を過ごすのだぞー！！』

「…。」

僕も七咲も呆然と立ち尽くしたまま  
お互いを見た。

「な…七咲、これから出掛けようか？」  
「は…は、え？ちよつと、待って下さい。」  
「どうした？」  
「えっと、私、明け方に帰るって。」



「うわ…じゃ、じゃあ補導されないくらい外に出てよう。その後はその時に考えよう。」

「はい。」

「あ…。」

「どうしました？」

「お金、ケーキに使っちゃった。」

「…。先輩。」

「ん？…。」

「なら…二人でパーティーしたいです。」

「へ？…え？あ、あうんいいけど。」

「じゃ、じゃあケーキ食べましょう？」

「ああ。」

僕と七咲は、こたつに入りながら  
ろくに会話もしないままケーキを食べた。

「て…テレビつけようか？」

「はい…。」

「…つしよと。」

『…スマス・イヴは恋人と過ごす甘い時間を楽しみたいですよね  
今日のミュージックアワードは、恋人と聴きたいベストソングを  
紹介して行きたいと思いまーすっ！！

（ワァアーーーー！！）『

「こ…これでいい？」

「はい。」

『…最初のナンバーはazusaさんでI love です…!!ど  
うぞー!!…!』

「七咲。」

「はい？」

「やっぱり回そう？」

「…やです。」

「すみません。」

もう一度また二人は黙り込んでしまった。

テレビから聞こえるラブソングが異様に心をくすぐった。

「…先輩。」

「ん？」

「やっぱり先輩の事大好きです。」

「僕もだよ七咲。」

「…ほっぺにクリーム付けて言うセリフじゃ無いですよ。」

「…ごめん。」

「ふふ、その顔でそんな顔しないで下さい…！」

「ひ…酷いなあ…。」

「ふふ…いいから口拭いて下さい…！」

「あ…そっか、ハハ。」

## 空色プールサイドFin

「先輩、」

「ん？」

「先輩の部屋に行ってみたいです。」

「別に構わないよ。」

「へえー、結構綺麗にしてあるんですね。」

「結構とか酷いよな七咲。」

「酷く無いです。」

「酷いよ。」

「じゃあそういう事にしておきます。」

「...」

「それより先輩。」

「ん？」

「美也ちゃんから聞いたんですが、先輩の部屋の押入れにはプラネタリウムがあるんですか？」

「うん。そんな大層なもんじゃ無いけどね。」

「見てもいいですか？」

「ああ、いいよ。」

「へえー、凄いですね。」

「そんなでも無いよ。」

「ねえ、先輩。」

「ん？」

「私にも書かせてくれませんか？」

「ああ、いいよ。」

「はい。」

「よっし……っとはい出来ました。」

「え？どついう事？」

「私と先輩の愛の印を。」

「へえー…可愛いね。」

「暗くして見ましょうよ。」

「え？あ…ちよっと！..！」

「ほら、よく見るでしょ？」

「う…うん。」

「先輩、あったかいですね。」

「そうかな？」

「ずっとずっとこうして居たい。」

「うん。七咲となら、いつまでも。」

「先輩…。」

「七さ…き。」

「今日は甘い夜になりそうですね。」

「ああ。」

## 空色プールサイドFin（後書き）

皆様。

ほんんんんんつつつつつとに  
すみませんでしたっ！！

土下座：

えー

七咲逢編

これにて終了でござ居ます。

長らくの休載

申し訳ございませんでした…

次回、えー

あ

二見英理子編でお会いしましょう！！  
では

## 次回予告

「お疲れ様。」

「あ、二見先輩。」

「だいたいの内容は掴めているから問題ないわ。」

「さすがですね。」

「あら？お世辞かしら。それにしても素晴らしいわね、七咲の泳ぎ、正直圧巻だったわ。」

「そんなでも無いです…。」

「いいのよ。遠慮は身に悪いわ。」

「あ、はい。」

「…。」

「…。」

「「あの」

「「…。」

「それじゃあ私から言っわ。」

「はい。」

「作者、また棚町の時の様にノー資料でやるつもりらしいけど、大丈夫かしら？」

「…まだですか、本当に飽きない人ですね。」

はうあ…。

「それでも期待はしておくわ。」

「じゃあ、後はよろしく願います。」

「ええ。二見英理子編、よろしく…。」

## 飽和恋愛滴定1

「次…高嶺さん、88点!!素晴らしいわね。」

高橋先生がテストを配り終えると  
断末魔が教室を駆け巡った。

「はいはい、今回の平均点は56.7。B組が最高の64.2  
だけ…やっぱり二見さんのいるクラスは格が違うわね。」

「二見かー!!」

「Aは絢辻さん、Cは高嶺さんと星野さんが底上げ  
だけど…、Bの二見に比べたらなー!!」

「おい相原、君はどうだったんだい？」

僕の隣の席から柊が覗いてくる。

「よく出来た方だよ…。」

赤いペンで57と書かれたテストを見せる。

「君にしては頑張ったものだな。」

「そういう柊はどうなんだよ…。」

柊はサツと69と書かれたテストを見せる。

「凄いな…。」

「日々の積み重ねと言っちゃつさ。」

「…ぐう。」

「それにしてもあの二見さん。凄いものだな。」

「え?どうしてさ?」

「僕の情報によると、彼女は100点だったそう  
だ。」

「え？…それって…凄いな。」

「ああ、今回も学年トップだ。」

「はあ…凡人にはわからない。」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6360v/>

---

アマキス・プラス+

2011年12月20日18時50分発行